

第8回世界考古学会議セッション「宗教遺産に関するグローバルな視座：世界的脈絡における沖ノ島および宗教の融合」について

岡寺 未幾

平成28年8月28日から9月2日にかけて、第8回世界考古会議京都大会（WAC8）が京都市で開催された。世界考古学会議とは1986年に設立された世界最大規模の考古学の国際学会で、約130カ国に会員をもつ。2006年に中間会議が大阪で開催されたことはあったが、原則4年に1度開催される本会議は日本で初めてであるだけでなく東アジアにおいても初めての開催であった。会議には、86カ国から約1500人が参加し、世界中の考古学者が集まって学術研究発表が行われるのみならず文化遺産と社会問題が論じられた。考古学と人権や教育との関わり、シリアや福島文化財の現状と考古学者の取り組みなど、多彩なテーマを議論する160のセッションが開かれ、約1800件の発表が行われた。この機に世界文化遺産への登録を目指す「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産に関わるセッションを行うこととなった。本稿はその記録である。

セッションのテーマは、「宗教遺産に関するグローバルな視座：世界的脈絡における沖ノ島および宗教の融合」である。冒頭、サイモン・ケイナー氏による趣旨説明が行われた。

宗教考古学は急速に発展してきた分野である。我々が世界中の宗教遺産をどのように扱うかという問題は、しばしば議論を起こしてきた。多くの宗教遺産は無形のものであるが、もちろん同時に多くの有形的側面を持つ。このセッションは世界宗教が拡散し、ローカルで在地の宗教的な信仰や実践と接触する際に生じる課題について取り上げる。また、仏教伝来およびそれが在地の信仰に与えた影響に関するという幅広いテーマを追究するために、特に沖ノ島のユネスコの世界遺産登録推薦に関わる研究について取り上げる。そして、比較とグローバルな視野に立った初期仏教や神道の研究を設定するべく、特に重層信仰（シンクレデ

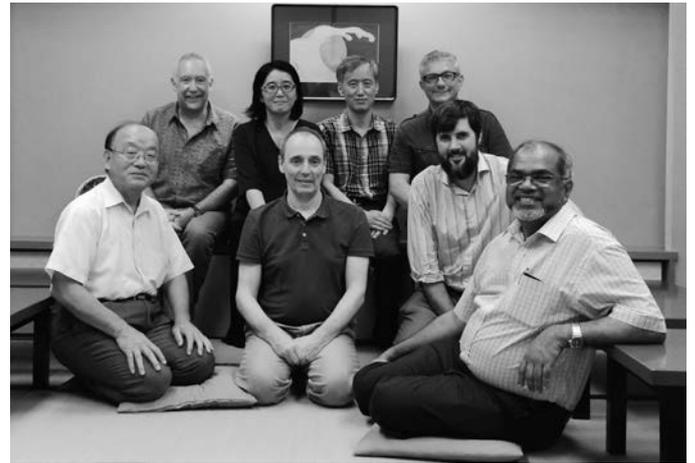
イズム）に関する考古学や、シルクロードを含む宗教遺産関連の事例研究に着目する。

合わせて本セッションの契機となった「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の顕著な普遍的価値の説明を岡寺が行い、引き続き6つの事例報告が行われた。

俵寛司氏は沖ノ島と同じく国境に位置する対馬における、古代から中世の祭祀遺跡・信仰の場の分析を行い、日本と韓国の国境における変化を捉えている。つづいて、沖ノ島に関わる二つの報告が行われた。ウェルナー・シュタインハウス氏は、国家形成において宗教・儀礼が果たした役割について沖ノ島の例に基づき議論を行った。また、氏は沖ノ島の祭祀の背後にある仏教の影響についても着目するべきだと論じた。禹在柄氏は、とくに韓国竹幕洞祭祀遺跡と沖ノ島を比較し、東アジアの交易システムを考える中で当時の航海技術に触れながら両者が長距離交易の成功を祈る遺跡であると位置付けた。シュタインハウス氏の固有の信仰と成立宗教の融合、および、両氏の交流という観点を受け、続く二つの報告が行われた。ティム・ウィリアムス氏は日常的に交易・外交・軍事関係の往来のあるシルクロードで仏教の伝播に時間がかかった理由について、シルクロードにおける仏教の伝播について国家による宗教の庇護の観点から論じている。また、サム・ニクソン氏は南アフリカにおけるイスラム教の伝播について、タドメッカの事例を元に報告し、固有の信仰にもとづく伝統が残っていることについても論じている。最後の報告は信仰に関わる遺産の保存管理の観点からのガミニ・ウィジェスリヤ氏の報告であった。宗教的な価値を有する資産は、時に保護とのバランスをとる必要があり、特に関係する共同体の声を聞き、地域文化に敬意を払うことが必要であると述べられた。



サイモン・ケイナー氏（司会）



セッション参加者

今回のセッションの報告は範囲と対象が非常に広範にわたるものであったが、一方で信仰の遺産としてのつながりを示し、今後、国際的な比較研究を進める上で様々な問題を提起するものであった。また同時に世界的な視野から見た「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群のもつ価値を改めて浮き彫りにするものでもあった。特に沖ノ島における祭祀の変遷とその背後にある

仏教の伝来と日本固有の信仰の体系化の過程の関連づけについては、今後さらに深めていく必要がある。

本セッションでは、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の推薦書を作成する過程で長年協力いただいた英国セインズベリー研究所のサイモン・ケイナー氏をはじめ多くの専門家の方々にご協力いただいた。記して感謝したい。

第8回世界考古学会議 セッションT11-C 概要 テーマ

「宗教遺産に関するグローバルな視座：世界的脈絡における沖ノ島および宗教の融合」

オーガナイザー：サイモン・ケイナー（セインズベリー研究所／英国）

岡寺未幾（福岡県世界遺産登録推進室／日本）

サム・ニクソン（セインズベリー研究所／英国）

司 会：サイモン・ケイナー

次 第：

趣旨説明 サイモン・ケイナー

説明 岡寺未幾 「「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群」

報告

1 俵 寛司（長崎国際大学）

「対馬における儀礼、聖なる場所（アジール）：韓国と日本の国境における境界人の視点」

2 ウェルナー・シュタインハウス（広島大学特任准教授）

「沖ノ島：宗教・儀式と権力・国家形成の関係」

3 禹 在 柄（韓国 忠南大学校教授）

「沖ノ島祭祀遺跡にみる東アジアの交易システム」

4 ティム・ウィリアムス 英国 ロンドン大学

「中央アジアへの仏教の伝播と庇護」

5 サム・ニクソン

「西アフリカのサハラ横断交易ルートにおける信仰の遺産：タドメッカ（マリ共和国）の南サハラマーケットにおける初期イスラムの景観」

6 ガミニ・ウィジェスリヤ イタリア イクロム（文化財保存修復国際センター）

「宗教的価値と聖なる世界遺産の保存管理における顕著な普遍的価値を両立する」

報告1. 俵寛司

「対馬における儀礼と聖域（アジール）：韓国と日本の「境界」におけるコスモポリタンの視点」

本稿では、対馬の祭祀に関わる「聖域」（アジール）の考古学的資料に焦点を当て、対馬だけでなくアジア全域における古代世界と現代社会の境界への理解を深めるべく、その歴史及び関連問題を明らかにしたいと思います。

10世紀に完成された日本の法律と習慣に関する初期の教本である延喜式から、私たちは対馬に存在する29の神社について知ることができます。古神道の信仰を表すと見られるこれらの祭祀的地域や聖地の多くは特定されており、現代も残されています。

近代以前の日本の境界と国境に関するブルース・パートンの考えに基づいて、文化的、経済的相互作用を推進する政治的境界を特定することよりも、先住民社会の間でそれらが頻繁に起こるべきであった国境領域についてお話したいと思います（Bruce L. Batten, 2003. *To the Ends of Japan*. University of Hawaii Press）。パートンは、境界の複雑さと複数の性質を強調し、いずれも境界及び国境などと訳される「ボーダー」「バウンダリー」「フロンティア」の3単語の意味をそれぞれ定義しました。彼によると、フロンティアは空間的領域である一方、バウンダリーは比較的線的であり、空間ではありません。

私の論文に関する地理的および歴史的背景について、少し説明したいと思います。対馬は日本の「境界」島であり、朝鮮半島に最も近い日本の領土を構成しています。福岡市との距離は約120～160キロですが、釜山市との距離は約49.5キロ。対馬の長さは約82キロで、土地の90パーセントは深い森と険しい山々に覆われています。

耕作や水田に適した土地はわずかですが、銀や貴石などの鉱物資源が豊富です。広大な海岸線と無数の湾は、海洋資源の活用を可能にするだけでなく、島内外の交流手段にもなっています。複数の歴史文書が、15世紀の文書『海東諸国記』内に描かれている中世日本の対馬の姿を記録しています。地図上で、対馬がいかに大きく、いかに重要な存在であったかを伝えていま

す。当時、対馬の多くの人々は倭館と呼ばれた朝鮮半島の外国人居留地に居住していました。

釜山の居住地は、日本の中世から近世まで続きました。右のスライドが示すように、李氏朝鮮は日本に派遣団を送ります。それは、隣接する二つの国家間のユニークな関係でした。この二つの写真は、著名な対馬歴史学者である永留久恵氏が書いた論文から引用されています（永留久恵2000「対馬・壱岐」谷川健一編『日本の神々 神社と聖地』白水社）。左のスライドは、式内社のような旧神社の分布と、3～7世紀の埋葬遺跡です。永留氏は、対馬島の式内社は、通常埋葬遺跡の近くに位置していることを指摘しました。右には対馬の天道祭祀遺跡の分布が示されています。天道は、天の神を表します。従って、龍良山は対馬で最も重要な祭祀の場となっています。

神聖な龍良山の周辺の天道祭祀遺跡には、八丁角、裏八丁角、内院の宝篋印塔などがあります。対馬島北部では、志多留地区のセーンカミ、木坂のヤクマの塔などがあり、特にセーンカミは、網野善彦氏によりアジールの概念と関係して論じられました（網野善彦1996『増補 無縁・公界・楽 日本中世の自由と平和』平凡社）。

こちらは上対馬町五根緒の祭祀遺跡、曾根崎神社の積石遺構群と塔ノ鼻積石塔です。塔ノ鼻は、神の岬、塔の岬を意味します。積み石や土を盛った形状の多くの遺構がこの地に残されていました。しかし、2010年の私の調査では人工物らしき遺物を発見することができず、この場所が墓地であるかどうかを特定することはできなかったのです。この図は、塔ノ鼻から天頭山までの景観を示しています。この軸上に曾根崎神社の積石遺構群はあり、この地が神聖な空間として、中世の天道信仰と密接に関係していた可能性が考えられます。

第二に三根遺跡遺跡（山辺区）です。こちらは遺跡の所在地を示しています。次に、左図は、三根遺跡6・7区の弥生・古墳時代の住居跡です。右上の写真は住居址、右下の写真は溝状遺構です。これは三根遺跡（山辺区6・7区）における出土土器の時期別構成です。これらの時期において、最大70パーセント以上が朝鮮半島系土器もしくはその影響を受けた土器で構成されて

います。そして、これは三根遺跡における陶磁器の出土状況で、中国、韓国、日本で作られたものです（降矢哲男2008「中世日本の辺縁部における地域性－対馬・壱岐・五島・琉球の状況から－」『九州と東アジアの考古学』より）。

特にこの地域では、弥生・古墳時代の集落遺跡と埋葬遺跡は、天神山・天神社、神ノ山・天諸羽命神社、伊豆山・海神神社などの神聖な山々とともに、延喜式神社の近くに存在しています。

こちらのスライドは、同地区における景観の時系列変化を表しています。このエリアには、集落、墓地、そして聖域または神社という、三つのタイプと三つの機能のカテゴリがあります。最初に、集落と墓地。次に聖域または神社が出現し、最後に墓地が失われました。古代後期から中世初期にかけて、変化が起こります。これらの写真は、三根遺跡の近くにある宝篋印塔を示しています。中世後期室町時代に存在していた守護大名など、当時の支配階級が信仰していた仏教の典型的な特徴です。この絵画は室町時代に行われていた十王を示しています。歴史家水谷類は、日本においては仏教の十王思想にもとづき、塔の外側が木製の小屋で覆われていると指摘しました（水谷類他2010『墓制・墓標研究の再構築』岩田出版）。

最後に、海神神社です。こちらは木坂地区における

遺跡の位置関係です。海神神社は、対馬島北部で最も有名な神社です。海神神社には、8世紀の新羅仏や13世紀の高麗青磁をはじめ数多くの宝物が伝世しています。これは海神神社弥勒堂跡遺跡から出土した13～14世紀の貿易陶磁で、その多くを朝鮮半島産が占めます（図右側は中国産）。関連資料として上県町大石原遺跡（12～13世紀）、美津島町尾崎水崎遺跡（14～15世紀）があり、これら対馬の中世遺跡における貿易陶磁の割合を示したのがこの図です（数値は降矢2008に基づく）。

結論に入りますが、対馬の祭祀遺跡及び聖域は、神道としての天道信仰と密接に関係しています。考古学的資料を基礎として考えた場合、集落、墓地、聖域や神社という三つの特徴的カテゴリがあります。聖域、神社などが生まれた後、墓地という存在は失われました。日本において、このような変化は、古代後期から仏教の影響を受けた中世初期にかけて起こりました。対馬の聖域や神社の遺物とその特徴は、日本と朝鮮半島との国境／境界を重ねながら、様々な要素により構成される当時の文化圏／文化的領域を示しています。対馬の祭祀遺跡および聖域の研究は、対馬のみならずアジア全域で古代と現代における国境／境界についての理解を助けてくれるでしょう。以上で発表を終えさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

T11C05

対馬における儀礼と聖域(アンール)、韓国と日本の「境界」におけるコスモポリタンの視点

俵 寛司
(長崎国際大学/ 日本)

T11C / RY0B1 / SS6
Global perspectives on religious heritage: Okinoshima and the formation of syncretic beliefs in world context

Organiser(s): Simon Kaner (Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures / UK), Miki Okadera (Fukuoka Prefectural World Heritage Registration Promotion Division / Japan) and Sam Nixon (Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures / UK)

The Eighth World Archaeological Congress.
Doshisha University, Kyoto, 28 Aug - 2 Sep, 2016.

上縣郡(16社、大社2 小社16)

1. 和多都美神社 名神大社
2. 嶋大國魂神社
3. 能理刀神社
4. 天語羽命神社
5. 天神多久頭多麻命神社
6. 幸努刀神社
7. 小須宿禰命神社
8. 那須加美乃金子神社
9. 伊奈久比神社
10. 行相神社
11. 和多都美御子神社 名神大社
12. 胡藤神社
13. 胡藤御子神社
14. 嶋大國魂神御子神社
15. 大嶋神社
16. 波良波神社

下縣郡(13社 大社4 小社9)

1. 高御魂神社 名神大社
2. 銀山上神社
3. 雷命神社
4. 和多都美神社 名神大社
5. 多久頭神社
6. 大祝詞神社 名神大社
7. 阿麻氏留神社
8. 住吉神社 名神大社
9. 和多都美神社
10. 平神社
11. 敷嶋神社
12. 都々智神社
13. 銀山神社

式内社
延喜式記載の29の神社

「境界」の概念 (バートン, B.L. 2003)

- フロンティア: 曖昧で空間的に拡散した社会集団間の区分
- バウンダリー: これもまた社会的な境界であるが、比較的よく定義される一領域(ゾーン)に対し、地図上に書かれた線
- ボーダー: 地理的な明瞭度に関わらない社会的な区分の総称

Bruce L. Batten, 2003. To the Ends of Japan. University of Hawaii Press.

*和書ではブルース・バートン 2000 『日本の境界 前近代の国家・民族・文化』青木書店等

複数のボーダーが重なり合う フロンティア領域 (バートン 2003).

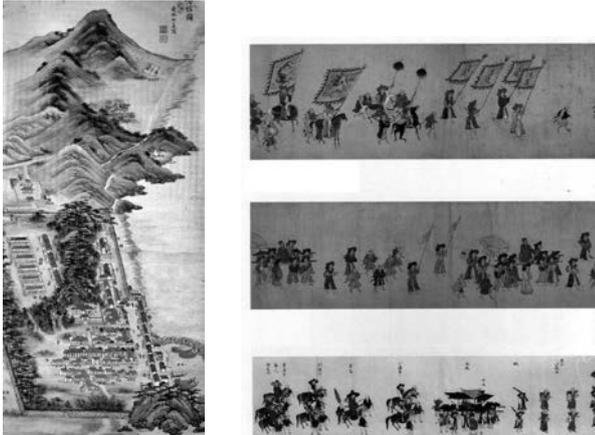
P=政体
C=文化圏
または文化領域
E=民族集団

FIGURE 3. The frontier zone as a set of multiple, overlapping borders.
P = polity; C = culture zone; E = ethnic group.

Bruce L. Batten, 2003. To the Ends of Japan. University of Hawaii Press. P121 Fig.3

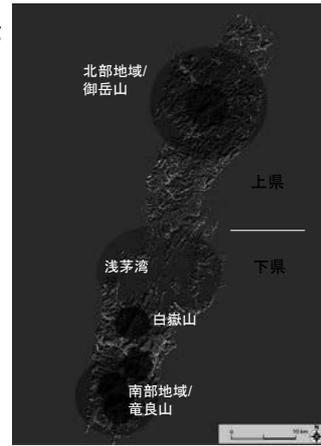


近世対馬藩の草梁倭館(釜山)と朝鮮通信使

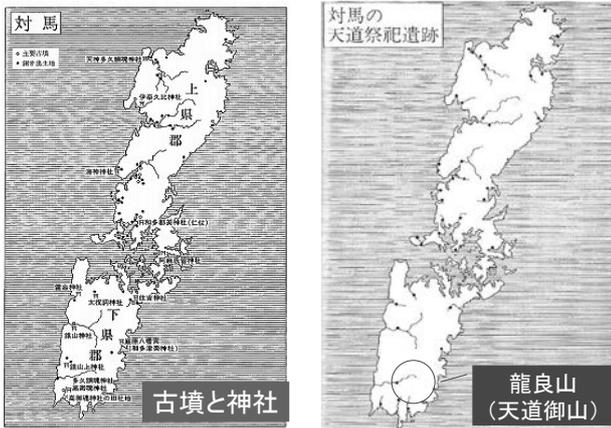


出典: 釜山博物館編『釜山の歴史と文化』(釜山博物館、2002年):124, 142

対馬の聖域と地理的区分



対馬の天道祭祀遺跡



永留久恵「対馬・舌岐」谷川健一編『日本の神々 神社と聖地』(白水社、2000年)より

対馬南部・龍良山周辺の天道祭祀遺跡



浅藻 八丁角(おとろし所)



内院 宝篋印塔(南北朝期)



内山 裏八丁角

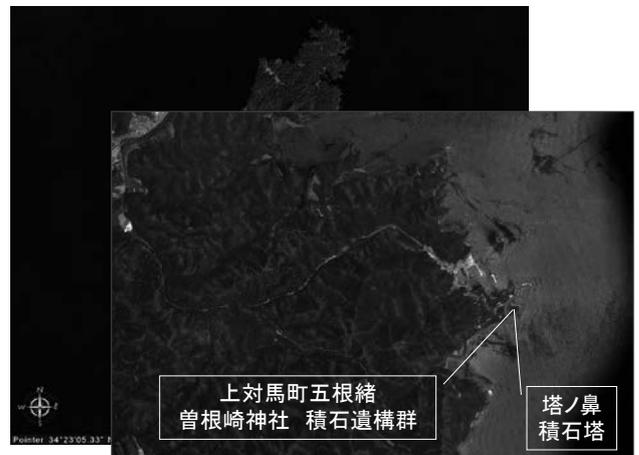
対馬北部の天道祭祀遺跡

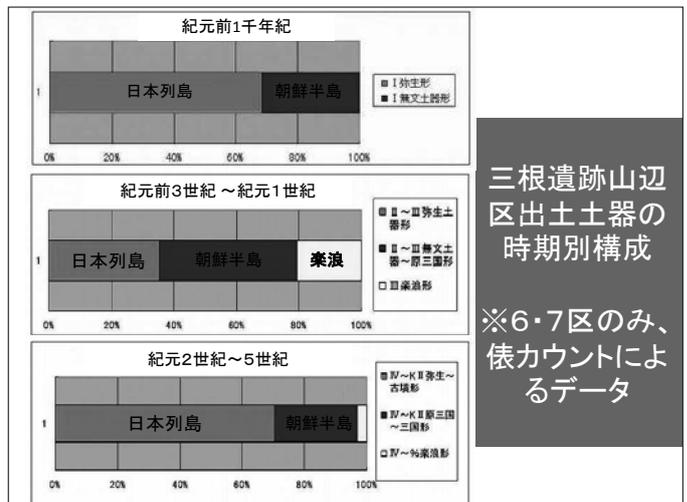
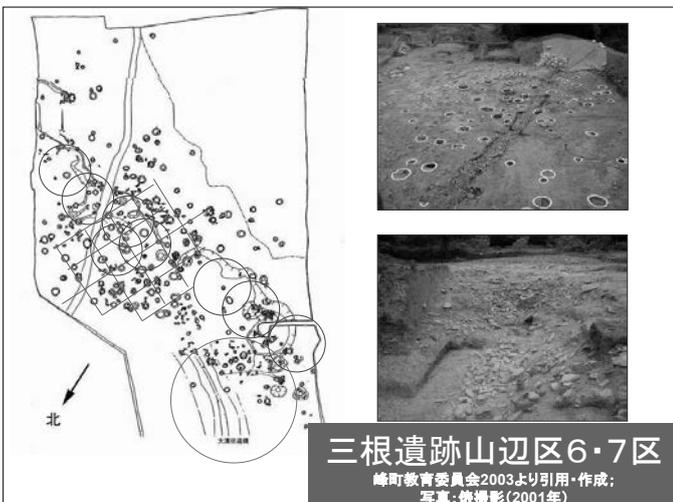
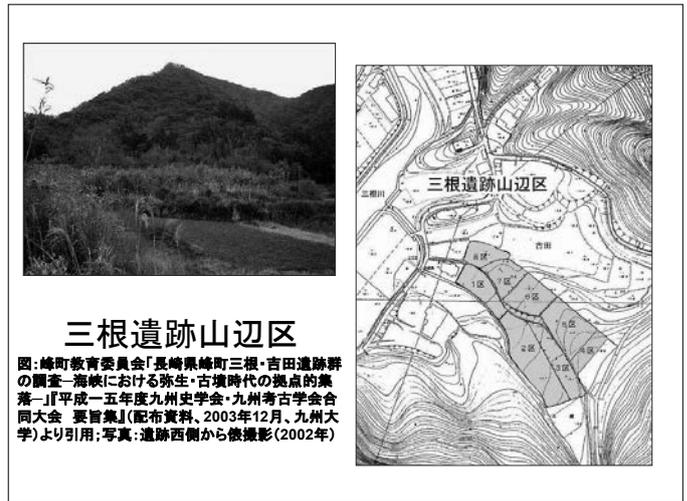


志多留 センカミ



木坂 ヤクマの塔

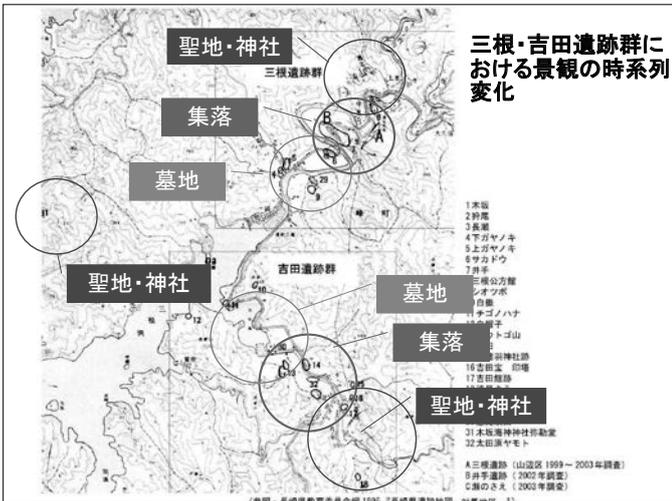


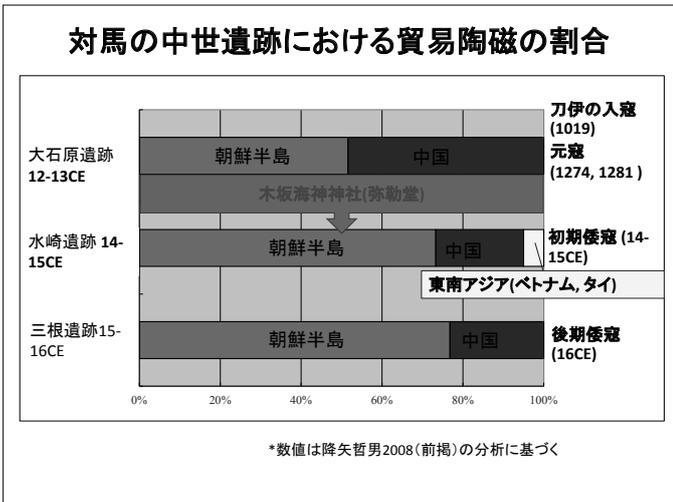
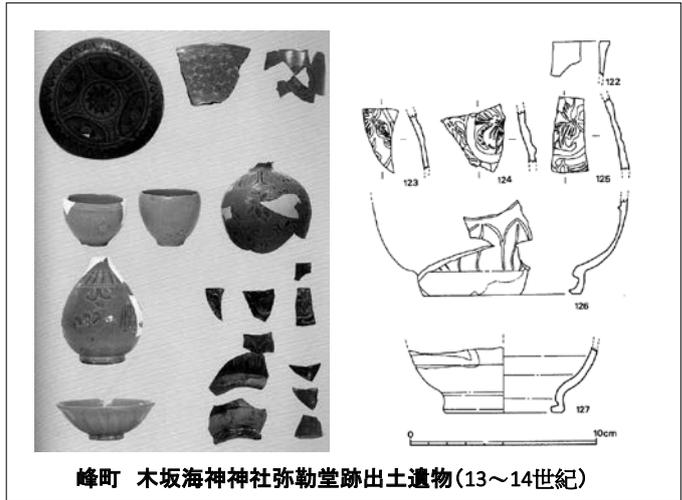


三根遺跡における陶磁器の出土状況

- a. 国産白磁・同安窯青磁、高麗青磁を中心とした(11世紀後半から12世紀代の貿易陶磁器(1区))
- b. 龍泉窯系青磁・褐釉陶器、高麗磁器を中心とした13世紀から14世紀代の貿易陶磁器(5・6・7区)
- c. 15世紀から16世紀にかけての貿易陶磁器や少量の国産土器・陶磁器(5・6・7区、8・10区)
- d. 17世紀から19世紀にかけての肥前磁器を中心とした国産土器・陶磁器(5・6・7区)

降矢哲男「中世日本の辺縁部における地域性—対馬・杵岐・五島・琉球の状況から—」『九州と東アジアの考古学』(2008)より





結論

- (1) 対馬の祭祀遺跡及び聖域は、神道としての天道信仰と密接に関係している。
- (2) 考古学的資料を基礎として考えた場合、集落、墓地、聖域や神社という三つの特徴的カテゴリーがある。日本において、このような変化は、古代後期から仏教の影響を受けた中世初期にかけて起こった。
- (3) 対馬の聖域や神社の遺物とその特徴は、日本と朝鮮半島の国境／境界を重ねながら、様々な要素により構成される当時の文化圏／文化的領域を示している。
- (3) 対馬の祭祀遺跡および聖域の研究は、対馬のみならずアジア全域で古代と現代における国境／境界についての理解を助けてくれる。

報告2. ウェルナー・シュタインハウス 「沖ノ島：宗教・儀式と権力・国家形成の関係」

広島大学のウェルナー・シュタインハウスです。本日お招きいただきましたこと、福岡県関係者の皆様に感謝申し上げます。私はサイモン・ケイナー氏と同じように、これまで長らく沖ノ島の世界遺産を登録する活動に関わってきました、それは大変洞察に満ちた経験でした。私の前に発表されたスピーチは全て素晴らしく、特に岡寺さんについては、宗教と儀式の権力が国家形成の関係に影響する理論的側面についてたくさん話をしております、この遺産を紹介することができてとても嬉しいです。よってスライドを少し飛ばしますので、とても助かります。

国家形成と儀式のような話題を15分に絞ってお伝えするのは非常に難しいのですが、なんとかやってみようと思います。まず初めにいくつかの一般的側面についての質問なのですが、儀式と宗教は国家形成過程においてどのような役割を持っていたのでしょうか？まず一般的に言えることは、儀式は宗教や信仰と密接に結びついており、国家形成において重要な役割を果たすということです。これについては議論の余地はないでしょう。歴史学者や考古学者にとって、宗教と儀式の関係や、権力と国家形成の関係を明らかにするのは非常に重要なことです。従って、儀式は、より理論的な観点から言うならば、秩序を創造するための要素です。これは本日私がお話ししたいトピックの一つですが、一方では考古学的な情報源と文字で残された記録の相対的価値であり、儀式の場の考古学的資源や、特に儀式について後々書かれたものについて私たちは批判的でなければなりませんし、また延喜式は先ほどのお話の中で言及して下さっていました。

私の主な研究分野の一つでもある比較研究と大きく関係するもう一つの側面は、ヨーロッパにおけるキリスト教の意義と日本列島への仏教伝来であり、私はこれらが国家形成において重要な要素であると考えています。よって、この説明の主な側面の一つでもあります。沖ノ島の遺産につきましては、そこで物語のような国家儀式が行われているということなのです。ですので、国家祭祀、権力、儀式の場所の間の繋がりと

関係について少し詳しく解説したいと思います。遺跡の概要を改めて簡単に説明しましたが、これらは全て既に耳にしたことがあったと思います。これらに関してまず初めに、国家、国家の概念、及び国家形成プロセスとは何か、そして明らかに進化した社会構造や統治、そして古墳に埋葬されている事実について。次に、ヨーロッパの研究や民族学の話題にもなっている神聖王権、祭祀王にとっても非常に重要な事柄について。そして、中世初期の研究において過去20~30年の間に特に話題となった別の側面、国家形成と支配における儀式の力について。さらに、私が非常に興味を惹かれる点でもあります。この定義について広範にわたり書き記したドイツのエジプト学者ヤン・アスマンによって先導された、プライマリー宗教とセカンダリー宗教の違いについて。そして最後に、日本列島における宗教、儀式、国家形成についても言及します。

まず初めに、国家とは、国家の概念とは何でしょうか？古代日本については、7世紀後半の日本列島に現れた政治主体は、中国大陸をモデルとし成熟した国家であったと結論づけることができます。国家の概念について、この問題には立ち入りませんが、主な問題の一つは、ヨーロッパにおいて、現代の立憲国家やその他の国家と法律の概念を過去に投影する傾向があるということです。日本の国家形成について、一般的な研究では国家形成のプロセスは3世紀中頃から始まったと考えられています。中国のモデルに基づき、律令による中央集権的な国家形成のプロセスは、一般に7~8世紀の間に始まったと考えられています。古墳時代についての議論は、中心と周辺の関係の評価によって大きく左右されます。沖ノ島は明確に周辺部に当たるため、これもまた非常に重要な側面です。しかし、例えば一方で、物の見方や方法は、いわゆる国家祭祀の構築に関する沖ノ島の遺跡の解釈に影響を与えています。歴史的なプロセスは、初めのスタンダードな前方後円墳が登場し、その後、中央集権的律令制となったときの沖ノ島に関するものであり、モデリング及び国家形成、権力、関連する社会的、政治的構造に対してどのような概念を持つかは、沖ノ島のような遺跡の解釈において非常に重要です。

また、日本で新進主義のステージモデルは、様々

な理由から英米の考古学会でますます批判されており、特に同じ時間と地域、異なる時代のみにおいて、実際に日本とヨーロッパの研究方法の間には二つの顕著な違いが見られます。第一に、ヨーロッパにおけるマルクス主義的アプローチ、特に中世に関するものは日本のそれほど強くはなく、国家形成についても非常に重要な問題です。そして、ヨーロッパの学者は、現代の法治国家および中世初期における国家とは何かを定義しようとしたローマ帝国前夜という全く異なる観点から、中世初期の社会の偏向的見識をほぼ克服しています。

これらの遺跡についての新たな話題は、社会構造とは何か、支配とは何か、誰が古墳に埋葬されているのか、神聖王権、また祭祀王が埋葬されているのか、などです。

古墳時代に関して申し上げますと、私たちは実際には同じ葬送儀礼や埋葬行為を共有しているかもしれませんが、それは必ずしも上位の政治的権威を表すとは限りません。とすれば、古墳に埋葬されているのは一体誰でしょう？これは非常に難しい質問です。私たちは、考古学的特徴から祭祀遺跡または埋葬遺跡を特定しました。それについて、疑う余地はありません。しかし、例えば、考古学者として、王様や権力の間を繋がり特定することは非常に難しいのです。これは、沖ノ島の遺跡に関してみなさんが疑問に思われていることでもありましょうし、故にヨーロッパ中世初期の研究において非常に重要なテーマとは、儀式の力なのです。そして、儀式は秩序を生み出す要素ですが、儀式だけで国家を構成することは不可能です。故に、儀式は重要な要素であると同時に実際に秩序を確立してはいますが、それだけでは十分ではありません。しかし、古墳時代の殆どの期間を占める無文字社会においては、公的な祝祭や様々な儀式が結束力を持ち、それらが秩序を作り出していたのです。宗教儀式は宗教や宗教団体の組織化を促進するため、体系化が不可欠です。中世初期の世界とヨーロッパにおけるキリスト教は、今も昔も権力を確立し維持するための最も重要な形成的及び支持的要素の一つであり、また長期に及ぶ私の調査によりますと、日本の国家形成プロセスにおける仏教の存在も同様に重要であり、沖ノ島の遺跡は大変過

小評価されていると考えています。

最後に、アスマンのプライマリー及びセカンダリー宗教について、沖ノ島に関する非常に重要な要素とは、プライマリー及びセカンダリー宗教制度双方の違いを明らかにすることです。アスマンによると、初期の宗教制度は主に地域的、有機的な発展であり、その大部分は特別な地域に限定されています。よって、彼らには世界の発展などという目的論的概念はほとんどないのです。ですので、例えば神道については、神と調和的關係を築くプライマリー宗教であること、この部分が大変重要なのです。

その一方で、セカンダリー宗教はキリスト教、最後の審判、仏教とカルマの概念、善と悪の違いのような正義の原則に基づいており、それらの概念は書物として残された道德規範に基づいています。そのため、それらはいわゆる書物の宗教であると言われており、また言葉や書物は非常に重要な要素であるため、それらはいわゆるセカンダリー宗教と呼ばれているのです。それらは、また、統治や教育などに関わるだけでなく、ヨーロッパでは教会や修道院、日本では仏教の寺院などにより、実際に地域を超えた組織をサポートするものとなっています。

そこで、日本列島の宗教や儀式において、成熟した国家としての最終段階で、ヤマト政権は天と地の神に対する天皇の普遍的崇拝に現地の地域信仰を取り入れ、地方勢力の受容を試みました。このことは神祇信仰と呼ばれ、儀式とその創造は中央集権国家建設のために重要な戦略的役割を果たします。地域及び地域を超えたレベルでの儀式的コミュニケーションとは融合という言葉で表され、それは新旧の機能を結集して新たな秩序を創造しようとするものであり、制度化と調和化を伴います。

しかし、これは仏教が存在しなければ実現不可能だったことであり、この神祇信仰の秀逸な点を如実に表しています。

そこで、国家信仰は一貫性のある宗教の印象を作り出そうとしましたが、沖ノ島のように多く見られるもの、対馬に見られるものというように、多くの土着及び氏族の神々の独立した信仰がありました。従って、仏教の発祥以前には一貫した宗教制度というものが存

在しませんでした。ですので、神祇信仰、陰陽思想、そして仏教の三つを結ぶトライアングルは、双方が国家に対し神と人民の仲介者として現れる構造を作り出すための、鍵となる要素でした。

結論に入らせていただきますと、儀式は宗教や信仰とリンクしており、特に初期の社会において、その働きは社会的、政治的システムを安定させることであると一般的に認識されている、このように言っても良いと思います。日本列島上での国家形成において最も重要な点は、アジア本土との交流であり、沖ノ島にとっても重要な要素です。そのため、私の所感によりますと、沖ノ島の祭祀は、交流が最も盛んであった段階で

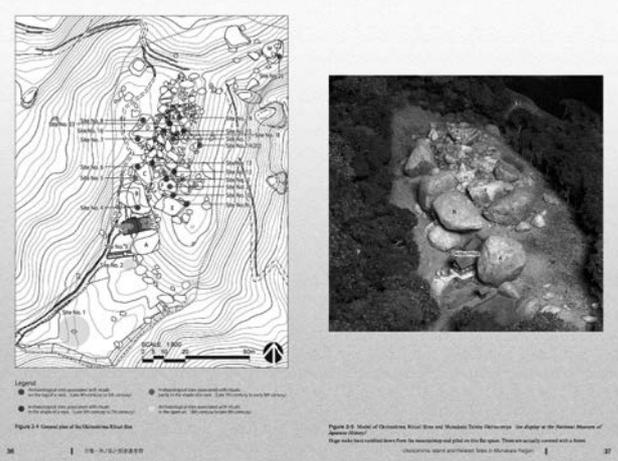
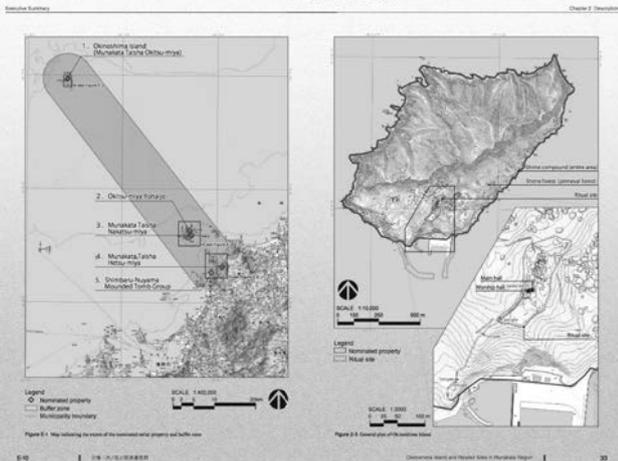
大陸と接触し、またそれを支援しました。国家形成プロセスにおける儀式や宗教の要素としては、セカンダリー宗教の普遍的な特徴を考慮しなければなりません。が、仏教の影響はプライマリー宗教のそれを凌ぐほどに大きく高まりました。最後になりますが、日本の宗教制度がヨーロッパと大きく異なるのは、日本においてそれまでの信仰体系の統合が国家形成の主な要因であったこと、新しいアイデンティティの融合と創造の主要な要因でありました。3つのシステムが融合した横断的な結束力を備えた点について、多少なりともお話できたかと思えます。ご静聴いただき誠にありがとうございました。

沖ノ島—宗教・儀式と権力・国家形成の 関係において

ウェルナー・シュタインハウス
広島大学大学院文学研究科特任准教授

- ・ 儀式や宗教は国家形成の過程でどのような役割があるか。儀式は、宗教や祭祀と結びついて、国家形成の過程で重要な役割を果たすものである。
- ・ 儀式・宗教と、支配・国家形成との一般的な関係についても考察していきたい
- ・ 秩序形成の要素としての儀式
- ・ 考古学的資料と歴史学的資料が交錯する問題
- ・ ヨーロッパにおけるキリスト教化の過程と、日本列島における仏教伝来を、国家形成の過程における重要な要素と影響として取り上げるべきである。

沖ノ島祭祀遺跡



- ・ 国家とはなにかー 国家の概念 — 国家形成過程
- ・ 社会構造と支配 — 古墳の被葬者の役割と性格について — 神聖王権、祭司王
- ・ 儀式のカー儀式と宗教のコンテクストから見た国家形成と支配ー
- ・ プライマリー宗教とセカンダリー宗教
- ・ 日本列島の国家形成における宗教と儀式

・ 国家とは何か。国家の概念

古代日本の国家

日本列島の7世紀後半から成立した政治体制は、疑いなく完全に成熟した国家である。

国家の概念

問題点:現代の立憲国家の概念や国家概念、法律概念などが過去に投影されてしまう問題である。

・ 日本における国家形成過程

中国を手本とした日本の中央集権律令国家の成立過程の出発は3世紀中頃と考えられている。

古墳時代の論点は、**中核とその周辺との政治的関係をいかに評価するか**に大きく左右される。

沖ノ島のような遺跡は、時々**見解の違い**によって、異なった判断がなされてしまう。

つまり、さまざまなモデル、あるいは、最初の定型化した前方後円墳から後の中央集権の律令国家の間にあたるこの時期を扱った文献から、国家の形成過程や支配、それに関連する社会的政治的構造をいかに定義するかによって、見解が変わるのである。

新進化論の段階モデルは、一般に英語圏の考古学では次第に批判されはじめている。このような社会政治的・直線的な発達を取り入れることは、課題が多いのである。

日本での討論から考えると、ヨーロッパの中世前期の研究には大きく二つの違いがあることがわかる。:

1. ひとつが**マルクス主義的議論**が欠如していること、またはそういう論があまりにもはやく克服されていることである。
2. もうひとつ特徴的なのは、**中世前期の社会の解釈を現代の立憲国の観点から、あるいは逆に、先行するローマ帝国を基礎に比較し評価することがな**らぬということである。

・ 社会構造と支配 — 古墳の被葬者の役割と性格について — 神聖王権、祭司王

埋葬儀礼や埋葬慣習に見られる共通性を、そのまま逆推論的に上層の政治的統制と結びつけることはできないのだ。

・ 古墳には誰が埋葬されたか？

沖ノ島のように、伝承で伝わる供物を供えた場所や祭祀場がはっきりと確認できたとしても、それらが王やその支配と関係があったかについてはやはり証明が極めて難しいのだ。

・ 儀式のカーニバルと宗教のコンテクストから見た国家形成と支配

秩序形成の要素としての儀式

たしかに、儀式だけでは国家は形成されない。しかし、儀式は、秩序を作りそれを永続させることのできる重要な要素のひとつである。

儀式では、社会的関係が示され、それを将来にわたって維持することが約束されるのである。儀式は、公開性と荘厳さ、また文献で何度も強調される自由意志のおかげで、たいがい読み書きのできない人々をなにもまして結束させることができたのだ。

宗教と結びつくと、儀式は政治的統一や支配の安定化への結合力として働くことができる。儀式は宗教的共同体の設立の際にも重要な役割を果たす。つまり、宗教性を誘起させ、**信者たちの集団の制度化の勝因となりそれを推し進めて支える働きをすることができるのだ。**そのため、**儀式は宗教の制度化になく**てはならないものである。さらに仮定できるのは、宗教的共同体は制度化なしでは長続きすることができないこと、制度化に貢献した儀式のおかげでその存続と継続が保証されたということである。共同体の設立や他と区別をつけることでの集団アイデンティティーの確保という意味で、儀式は、宗教的認定や内外の規約、社会政治的秩序のために貢献したのだ。

ヨーロッパの中世前期の国家性について考察するとき、**日本での国家形成の過程における仏教の役割のように、キリスト教が国家形成の過程でその根本となる要素として、また、支配の確立とその維持において非常に重要な役割を持っていたことがわかる。**

・ **プライマリー宗教とセカンダリー宗教**
(ヤン・アスマンによる)

なぜキリスト教や仏教のような世界宗教が伝統的な社会においてそのような魅力を行ってきたのであろうか。

プライマリー宗教とセカンダリー宗教の宗教システム間の内容の違いである。

プライマリー宗教は、文化や伝統に根ざした宗教であるといえ、ヤン・アスマンによると、同じ文化と社会、たいていは同じ言語を持つ人々の間で数百年、数千年かけて歴史的に育まれたものであり、それらと切り離すことができないものである。

また、これらの宗教は伝統に起因しているが、その伝統は、世界的事件を思い起こさせる神話の太古を根拠にしている。そして、その起源について何度も繰り返し語るのがある。世界の発展などの目的論的な概念は無く、個人や人々の「救済」や「悟り」を目指す終末論的な目的もない。

プライマリー宗教は、それぞれの文化と結びつき、状況に合わせて、神々との調和的關係などといったさまざまな関係を作り出すのである。

セカンダリー宗教は、世界はひとつの秩序に支配されているという観念に導かれ、正義の原則を基礎としている。それはキリスト教では最後の審判の思想の中に、仏教ではカルマなどの中に見られるのもので、善と悪とを清算する約束を含んでいる。こうした概念が、道徳的な規範へと繋がっていく。

その際、決定的な要素となったのが、文化を伝える最も重要で新しいメディアとしての書物である。いわゆる書物宗教であるセカンダリー宗教は、神聖な書物、歴史的な創立者の人物像、信仰内容などを明確に確立していることにおいて傑出している。

アスマンによると、書物のないセカンダリー宗教は存在しない。書物のおかげで、その教えを広めたり指導者や神学者として解説をしたリデオロギー的に活動できる宗教の専門家が生まれたのである。彼らは宗教の内容の伝達者というだけでなく、儀式の挙行に重点をおく媒体となった。書かれた教えは宗教の次元を広げ、その万人救済主義的な望みも広げていった。このことは、教会や修道院にみられるような地域を超えた組織の構造と結びついている。

・ **日本列島の国家形成における宗教と儀式**

朝廷は、地方の祭祀を天皇の普遍的な「神祇」祭祀に組み込むことで、地方の権力を吸収した。実際、このことは、最も重要な神々が新しい朝廷の物語、つまり「神話」[mytho-history]にまとめられたことを意味し、それが日本の国家の起源を作り出した。また、朝廷が領土全域にわたって、神への奉納をする権限を引き受けたことも意味している。この物語と儀式の挙行によって、私たちが神祇祭祀と呼ぶ新しい祭祀システムが完成したのだ。

儀式とその成立が中央政権国家への戦略上重要な一歩であったことがわかる。古いものと新しいものとの間の、地域的な、また地域を超えた儀式的コミュニケーションが成立し、秩序を作り出され、それに伴って官僚化と統一化もなされた。

しかし、朝廷祭祀の中の神祇祭祀のもうひとつの重要な要素、仏教がなくてはこのことは成し遂げられなかったであろう。

国家祭祀は、その性格から単一宗教である印象を持たせようとしたものの、地方の神や氏神を抱く個別的な文化が多数存在したために、それらが一緒になって一つの宗教システムだとはっきり思えるような、整合的システムは存在しなかったのである。

この神祇祭祀と陰陽道、仏教の3つは、政治権力が邪悪な力から自らを守るために利用した主要な要素である。天皇を中心にする、仏教や道教、仏教以前の祭祀の要素をうまく融合させることで、これまで定義してきた神聖性のある王権の形成ができたといえるだろう。国家は入念に組織されたヒエラルヒー的な国家祭祀の助けを借りて、神と人間の仲介者となった。その役職から得られた天皇の神聖性は、ますます国家祭祀の中心へ移行していく。

・ **結論**

1. 儀式が宗教と祭祀と結びついて、国家形成の過程で重要な役割を果たしたことは、一般に認められている。また儀式は、原史・古代の社会にみられるように政体や国家の中でその設立を助け安定に寄与する秩序形成の要素として機能する。

2. 日本の国家形成でおそらく最も重要だったのが、大陸との交易だったであろう。この交易では、海路に依存するしかなかったため、大陸との交流がもっとも盛んだった頃に、沖ノ島の祭祀がこの交流の過程に付随した儀式として行われ、それを支援していたと仮定することができる。

3. 国家形成の過程における儀式的・宗教的側面では、キリスト教や仏教といった普遍的な望みを持つセカンダリーな書物宗教の方が、これまで述べてきたような理由から、整合的システムを持たず統合力のないプライマリー宗教よりも大きな影響力を持ってきた。

4. しかしながら、以前から存在してきた宗教観や儀式、儀式の場と結びつき、それらに適応して変化し、新しい融合宗教を作り出すことが、トランスパーソナル的なアイデンティティや人と人との繋がりが意識や政体の象徴的なコミュニケーション要素などを作り出すための国家権力の重要な戦略だったのである。

報告3. 禹在柄

「沖ノ島祭祀遺跡が語る古代東アジアの広域交易システム」

こんにちは、韓国から参りました禹在柄です。現在、忠南（チュンナム）大学校考古学科の教員を務めております。本日は、古代東アジアの広域交易システムが日本の伝統的な宗教聖地である沖ノ島祭祀遺跡の出現に与えた影響についてお話させていただきます。プレゼンテーションの後、ジョセフ・ライアン氏が質疑応答パートの通訳をしてくださいますので、先にお伝えしておきます。ありがとうございます。

こちらの図は、古代日本から韓国への航海ルートの復元図です。倭国の船による直行ルートは実際に存在しましたが、倭国の使い?商人が現地の船に乗り換えて交易活動を試みたというケースもありました。この概念図は、倭船舶の直行ルートです。こちらは加耶・百済船舶への乗り継ぎルートです。ここは加耶の領土です。この地域は百済の領土です。これらの図からおわかりのように、4～6世紀の倭国の大型船舶は、手漕ぎによって長距離航海を試みました。また、船上に見られる祭祀器物は、航海安全を祈って行われた祭祀の重要性を示唆する考古学的証拠です。これを見れば、これらが祭祀で使用された品であったことがわかります。これらは祭祀用品です。これはフラッグです。こちらはオールです。これらは大型船舶で、漕ぐことしかできません。

これらは、4～5世紀頃の朝鮮半島で発見された倭国の船形埴輪と同じタイプの船形土製品の写真です。そして、この写真は、日本列島で発掘された5世紀頃の船形埴輪を復元した実物大の船舶で実験航海が行われた光景を撮影したものです。日本においては、同じ中央型の海岸祭祀遺跡の間でさえ、発掘された遺物の質と量によって序列の違いが見られます。例えば、玄界灘に位置する沖ノ島祭祀遺跡は日本において最上級の中央型海岸祭祀遺跡です。一方、これらの中央型の海岸祭祀遺跡と在り型型の海岸祭祀遺跡の間にはいくつかの共通点があります。場所に関しては、双方とも隣接する航路が一望できる沿岸の斜面に造営されています。また、出土遺物についてですが、小型の石製模造

品や鉄素材など、専用の祭祀用品と貴重な必需品が一緒に供えられています。ここに韓国の竹幕洞祭祀遺跡があります。これは沖ノ島の祭祀遺跡です。これらは在り型型の海岸祭祀遺跡です。

これらは、韓国の金海大成洞古墳群から発掘された倭国の威信財です。これらは倭国中央で盛行したものでした。言い換えれば、4世紀頃の金海の金官加耶と倭国との交易は、中央権力間の交易であったことが推察できます。4世紀頃まで、倭国は金海の金官加耶を優先する外交戦略を取ってきました。しかし、5世紀初頃、高句麗が金官加耶を攻撃した後、倭国は韓国の西海岸に位置する百済と中国南朝を重視する多角的な外交戦略を採択するようになります。その結果、5世紀頃から百済地域では倭系遺物の出土が顕著になります。また、この時期、沖ノ島祭祀遺跡で観察された航海の安全を祈願する海岸祭祀の活性化は、百済の竹幕洞祭祀遺跡でも見ることができました。この事実は、長距離海上交易が、交易ルート上の主な分岐点に造営された海岸祭祀遺跡の盛行に、大きな影響を与えたことを示唆しています。大阪大学の博士課程に在学中、私は、ここの大成洞古墳群の発掘調査に参加しました。

これは沖ノ島の模型です。これらは、福岡県の沖ノ島祭祀遺跡で発見された小型の石製模造品です。これは石製短甲です。この写真は沖ノ島の港と祭祀遺跡の下にある崖です。ここが沖ノ島祭祀遺跡です。

こちらは百済の竹幕洞祭祀遺跡で発見された倭様式の小型石製模造品です。ここには石製短甲もあります。これは竹幕洞祭祀遺跡の模型です。5世紀後半頃、ここから小型石製模造品が発掘され、倭人も祭祀に参加していた事実が伺えます。竹幕洞祭祀遺跡は倭船舶が韓国の西海岸を經由し、百済の首都へ向かう過程で、必ず通らなければならなかったルート上の鍵となる分岐点に位置していました。この事実は、注目すべき事項です。従って、倭様式の小型石製模造品の発見は、5～6世紀頃、倭人を乗せた船が百済の首都へ向かう途中、竹幕洞祭祀遺跡に停泊していたことを示唆しています。また、乗船していた倭国の使い?商人たちも、この百済の地で行われた海岸祭祀に参加し、航海の安全を祈願していた事実は明らかです。この写真は、竹幕洞祭祀遺跡のある崖の上から見た百済の西海岸航路

です。ここにある家は、現在韓国の伝統的な宗教祭祀を行う会場として使用されている礼拝堂です。このエリアは百済の西海岸航路です。これは小型の石製短甲です。ここは竹幕洞祭祀遺跡です。この家は現在使われている伝統的な宗教の礼拝堂です。彼女たちは私の学生です。

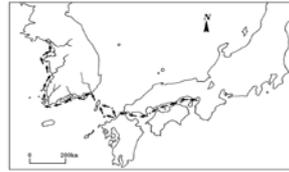
沖ノ島の生活環境は厳しいものであるにもかかわらず、ここは倭国最大の中央型海岸祭祀遺跡となりました。これは、九州地域北部と朝鮮半島南東部を結ぶ国際的な海上交易ルートの重要性を表しています。倭国の船は、通常の航路から遠く離れた沖ノ島まで航海し、そこで大規模な海岸祭祀を行いました。沖ノ島祭祀遺跡は、当時の倭国中央の最優先の外交戦略が中国?朝鮮半島の多くの国々との長距離交易を強化することであったという事実を反映する有力な考古学的証拠です。竹幕洞と沖ノ島で行われた海岸祭祀の主な目的は、海上交易ルートを通る船舶の安全と長距離交易の成功を祈ることであったと思われます。特に、竹幕洞と沖ノ島の祭祀遺跡は、古代韓国と日本の間で行われた海

上交易システムの研究において、大変貴重な考古学的資料です。沖ノ島祭祀遺跡は、古代日本の伝統的な宗教の出現と展開の研究において、重要な考古学的遺跡です。この沖ノ島祭祀遺跡の出現と展開は古代東アジアの広域交易システムを通じて、宗教に関する情報交換も行われていたことを私たちに語っています。言い換えると、古代東アジアの広域交易システムの活性化は、古代日本の海上交易のみならず伝統的な宗教の出現と展開にも大きな影響を及ぼしたと言えるでしょう。古代日本は、中国や韓国など東アジア諸地域との長距離海上交易を通じて、国家形成とその経営に求められる高度な知識や戦略物資を導入してきました。当時の東アジア諸国の使い?商人たちが取引を行っている際、宗教に関する情報交換も同時に行われたと考えられます。従って、沖ノ島祭祀遺跡は、古代東アジアの広域交易システムを研究する上で核心を占めるだけでなく、古代日本における伝統的な宗教の出現と展開を研究する上で出発点としても位置付けられるのです。ご静聴ありがとうございました。

沖ノ島祭祀遺跡が語る古代東アジアの広域交易システム

禹 在 柄
 韓国忠南大学校
 考古学科教授

5-6C頃の倭国から百済への航海方式の概念図 (禹 2011)



1. 倭船の直行ルート



2. 加耶・百済船舶の乗り継ぎルート

図9 5-6世紀頃の倭国から百済への航海方式の概念図 (禹2002; 禹2010)
 1 倭船の直行ルート 2 加耶・百済船舶への乗り継ぎルート

天理東殿塚古墳出土の船形絵画 (禹 2011)

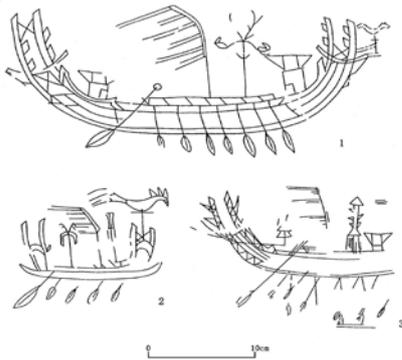


図3 天理東殿塚古墳出土の船形絵画 (禹2002)



한국 호림박물관 소장품(대성동고분박물관 2005)



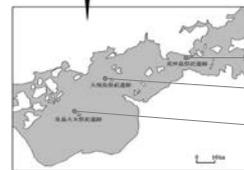
한국 호림미술관 소장품(대성동고분박물관 2005)



5세기경 왜 선박의 복원과 오사키-부신 간 실험 항해(오사카시 교육위원회 1989)



沖ノ島祭祀遺跡



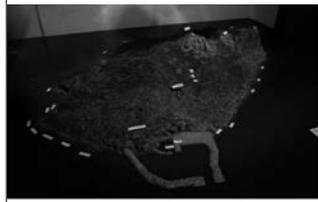
荒神島祭祀遺跡
 大飛島祭祀遺跡
 魚島大木祭祀遺跡

図1 倭国の海岸祭祀遺跡の分布(佐田1988; 亀井1988; 禹2010)

金海大成洞古墳群出土の倭様式の威信財



韓国金海大成洞古墳群(朝日新聞社1992)



1. 沖ノ島の模型



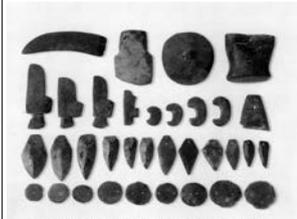
3. 滑石製短甲



2. 滑石製の小型模造品



4. 沖ノ島の港と祭祀遺跡の下にある崖(再撮影)



한국 부산 죽막동 제사유적(국립중앙박물관 1999)



(photographed by Woo)



한국 부산 죽막동 제사유적 복원도(국립중앙박물관 1999)

結論

- 沖ノ島は物資の補給が難しい島にもかかわらず倭国最大の中央型海岸祭祀遺跡になった
- 日本と韓国を結ぶ海上交易ルート的重要性
- 倭国中央の外交戦略
- 竹幕洞と沖ノ島双方の海岸祭祀は長距離交易の安全と成功を祈って行われた
- 古代東アジアの広域交易システムは日本における伝統的な宗教の出現と展開に影響を及ぼした
- 倭国では古代東アジアの広域交易システムを通じて先進知識と戦略物資の導入および宗教に関する情報交換が同時に行われた
- このように沖ノ島祭祀遺跡は(1)古代東アジアの広域交易システム研究の核心を占めるだけでなく、(2)古代日本における伝統的な宗教の出現と展開の出発点としても位置付けられる。

報告4. ティム・ウィリアムス 「中央アジアへの仏教の伝播と庇護」

こんにちは。改めて、本日この場にお招きいただきましたこと、主催者の皆様に感謝いたします。先んじてサイモンが言いましたように、私たちは現在、研究の対象を西洋から中央アジアへ少し移しています。やりたいことが二つあります。まず、インドから中央アジアへ、その後中国へ伝わった仏教伝播の痕跡を、非常に簡単にですが考察してみることに。そして、私はウェルナーが話していたことについて質問がありますので、いくつかの理論についてはスキップしたいと思います。仏教と国家形成と国家権力との間の関係について、特に仏教の普及速度と社会への浸透を踏まえ、より広い国の庇護について見てみましょう。

比較的最近までの従来の歴史年表では、アショーカ王が北西部のインド亜大陸へ仏教を伝えたのは紀元前3世紀のこととされています。しかし、紀元前1世紀まで、ガンダーラからバクトリアからへの伝播、そこから中央アジア西部への広がりを見ることはできません。カシミールからホータン王国まで山岳ルート経由での伝播についても同様です。その後、1～2世紀までに仏教がバクトリアとソグディアからトルキスタン西部、そして最終的には中国へ更に深く浸透し、チベット高原とネパールには、はるか後に伝わる、という見方がかなり一般的な見解でした。

その証拠は、時にアショーカ王碑文によって支持されます。例えば、現代のラグマンには、三つのアショーカ王の法勅、特にカンダハールの碑文があります。しかし、さらに近年では、アフガニスタンのメス・アイナクの発掘調査で200以上の仏像、仏舎利塔、40ヘクタールの寺院が見つかるなど、巨大な仏教の寺院がその様相を明らかにしています。今日では、そのほとんどは過去のものであり、非常に壮観でもあるのですが、発掘作業は非常に厳しい状況下で行われました。そこから発掘される良好な証拠は大変驚くべきもので、現時点での発掘担当者の意見によれば、寺院創設の時期は紀元前3世紀半ば頃であろうと予想されています。しかし、現実的にはそれについて書かれた文字記録は存在しないため、現時点では完全に信用に足る推測で

はないでしょう。反対に、もしそれが真実であれば、北西部からアフガニスタン地域へ早期に伝来した可能性が考えられます。3世紀より後のものであり、明らかに5、6世紀のものである彫刻をお見せしたいと思いますが、もし皆様がメス・アイナクの出土品をご覧になられたことがなければ、ぜひ一目ご覧ください。きっとその素晴らしい出来に驚かれることでしょう。

しかし、これらの磨崖碑文、特に第13碑文では、現代のトルクメニスタンやセレウコス朝であるメルブ遺跡から支配していたギリシャのアンティオコス王などへの僧侶の派遣があげられています。パルティアの使節団が結成されたことは知られていますが、使節団は紀元前2世紀末にアフガニスタン北部から中央アジアへ渡り、スリランカの結集（仏教者会議）へと向かっていました。つまり、それは2世紀末までにすでに確立されたシステムであったのです。

山岳ルートに関するところでは、北カシミールからタクラマカン砂漠南部にかけてのカラコルム街道は非常に厳しく、現時点ではそれら地域の年代調査はチベットに残された記録から紀元前1世紀初めと推察されますが、実際にはその推定の証拠となり得る十分な考古学的痕跡は見つかりませんでした。従って、ホータン王国から山道を経由して広がったのか、もしくは他のルートを経由して中央アジアからやってきたのか、何が最終的に中国への広がりへ導いたのかは議論の余地があります。

最も多くの情報を私たちに伝えているものの一つは中国に広がったバクトリア語です、これはサンスクリット語ではない言語での最初の翻訳であると思われ、インド北西部、パキスタン、アフガニスタンで話されていた言語であり、おそらく中央アジアから中国へ渡るルートが存在したという推測を支持する要素となり得ます。そのため、私たちは少し違った意見を持っています、おそらく紀元前2世紀にバクトリアとパルティア、さらに紀元前1、2世紀にはソグディア・匈奴にまで伝播し、またホータン王国も同時期に伝わりました、中国へ伝播したのは1世紀初頭です。

私が本当にお話したいことは、仏教の伝播になぜそんなに多くの時間が必要だったのかということです。

シルクロードについては、地域間で定期的な取引、外交関係、軍事的相互関係があったことが分かっています。一体なぜ、仏教は各地域を通過して伝播するのにそれほど時間がかかり、メス・アイナクの出土遺物を除き3世紀になるまで寺院群、仏教建築群において、目覚ましい発展が見られなかったのでしょうか？また、仏教の普及と国家との関係についてはどうでしょう？また、国家と個人の相互関係は？先ほど申し上げましたように、私がシルクロードについて話すとき、常にその本当の重要性は交易ではなく、人々の移動とそれに伴う思想の伝播であると主張しています。よって、私たちは交流による遅い伝播を見ているのでしょうか？それは国家の庇護が関わっているのでしょうか？それは仏教の中央アジアへの伝播に関わるのでしょうか、それとも仏教僧の動きとその広がりに関わるのでしょうか？言い換えると、私たちは国家インフラ的宗教としての仏教思想と仏教導入の最近のエリート層（宮廷から宮廷へ）同士の伝達を見ているのでしょうか、それとも必ずしも国家の賛同によらず、南部の人々の地域から地域への移動を見ているのでしょうか？

考古学的証拠が示唆していると思われることの一つに、もし紀元前1世紀、西暦1世紀までに中央アジアのルートを経由して仏教の思想が中国へ伝播したのなら、後になるまでエリート層の庇護を集める中央アジアの国々や寺院群の姿を見ることがなかったという点があります。

つまり、思想の移動と、それらの思想と国家との関係には、興味深い関係性があるように考えられるのです。おそらく、仏教の政治的・経済的庇護規模の指標としての寺院や芸術への庇護は、仏教の急速な伝播を妨げる障害となり、また、中央アジア地域の一部において仏教導入の障害にもなり得ます。つまり、それは、寺院コミュニティへの初期の投資を抑えたエリート層の庇護の欠如と受容の遅れによるものなのでしょうか？

その例外は、中央アジアにおけるクシャーナ朝の国家的庇護です。クシャーナ人たちはかなり初期の段階で仏教を導入しています。おそらく、クシャーナ朝とパルティア朝の相互関係が仏教の西洋への進出を妨げ

ていたのです。仏教がパルティア、後にササン朝、そして中央アジア北部にそれほど広がらなかったのは興味深い事実です。そして、ガンダーラとクシャーナ朝の権力基盤が発達した1～3世紀にかけて、寺院や寺院の建設ラッシュが起こったのです。ガンダーラとクシャーナ朝の芸術分野は5～6世紀にかけて目覚ましく発展しましたが、1～2世紀代の作品も見つかっています。3世紀頃に現れたとみられるパーミヤンなどの遺跡もあり、それは繁栄した巨大都市で、寺院群、芸術形式、ブツダ像などを創り出すために求められた400～500年に及ぶ大規模な投資でした。こちらは私が関わっている中央アジアのメルブ遺跡です、3～4世紀にかけササン朝の都市で仏教寺院や仏舍利塔が発達した興味深い事例です。南東部へ進むと、2キロに及ぶ巨大なササン朝の都市で、周辺の壁や北部の要塞を望めます。都市の中には比較的何もないエリアがあり、それらの意味についてお話しできる時間はないのですが、その地域について興味深いのは、3世紀にそこで仏教寺院の建設が行われていたということです。つまり、それは誰か強大な権力を持った人物が存在し、その空き地に寺院を建設できるほどの力があったという事実を示します。実際、ササン朝の都市に寺院を建設することのできるエリート層の権力があったことは明確です。皆様にお見せしたい素晴らしい出土遺物がたくさんあるのですが、時間の関係で詳細にご紹介することはできなさそうです。

1～2世紀のテルメズでも同様の状況が起こり、4～5世紀にはカラ・テペの寺院の建設が活発に行われました。これら仏教寺院は、中央アジアにおいて栄えました、その一例がタジキスタンのアジナ・テパで、ササン朝建築と仏教により体系化された空間が融合されています。そのことについてお話ししたいと思います。4～5世紀から7～8世紀頃にかけて、寺院は中央アジア全土に広がりました。非常に影響力のある携帯可能な芸術が開花すると共に、その全てはその段階において地域内の仏教に対し、以前は得られていなかったであろう、非常に強大なエリート層の庇護を得ていたことを示唆しています。

結論に入りますが、興味深いのは、記録が入手できる7世紀までに廃墟となった仏教寺院がどれだけあっ

たのかということです。7世紀までに、私たちは相互関係、どのようにして新宗教である仏教が庇護なしに繁栄してきたのかという問題、新しい宗教、信仰が導入され、国家のイデオロギーとエリート層のその宗教の実施をめぐる争い、中央アジアにおける仏教は重要視されていないように見え、おそらく財源も少なく、寺院は荒廃し、もはや放棄すらされているということなどを見てきました。

よって、おそらく中央アジアにおいて、初期の巡礼路と初期の僧侶の移動の間には非常に複雑な関係があると思われませんが、クシャーナ朝では紀元前3世紀になるまである程度の庇護は得られず、十分な庇護が得られるようになったのは2～3世紀になってからのことでした。それまでには、仏教はすでに東アジアのあらゆる地域にまで広がっていました。ご静聴いただきありがとうございました。

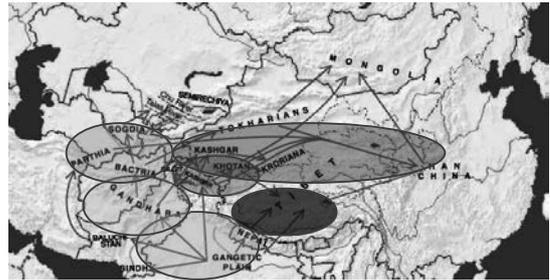
シルクロード交流 のネットワーク



中央アジアへの仏教の伝播と庇護



中央アジア地域における仏教の伝播



近年まで、仏教の伝播は以下のように考えられてきた:

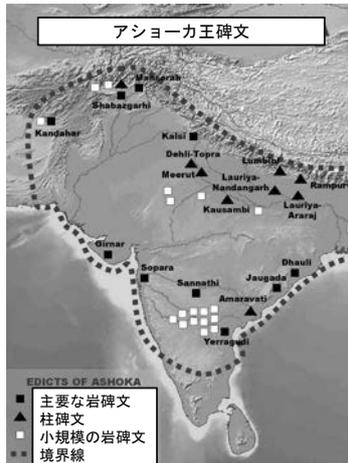
- アショーカ王は(紀元前269-233年 治世)は北西へと広げた
- 紀元前1世紀-ガンダーラからバクトリア(そして中央アジア西部へ)
- 同時期にカシミールからホータン王国へ
- 1世紀から2世紀にかけて西トルキスタンへ、バクトリアとソグディアから中国へ

証拠: 紀元前3世紀

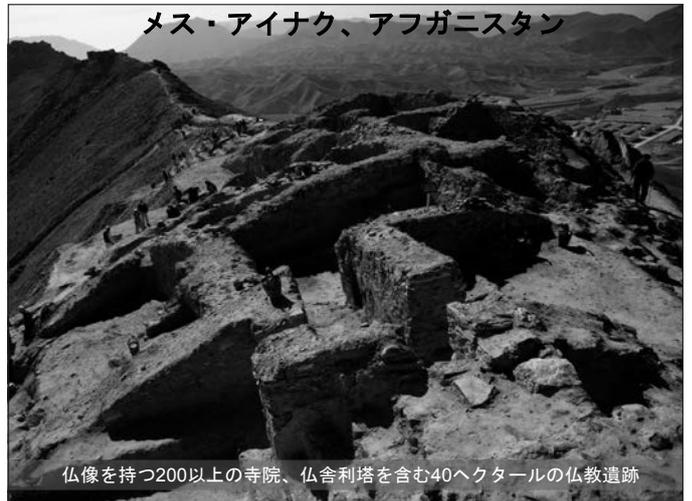


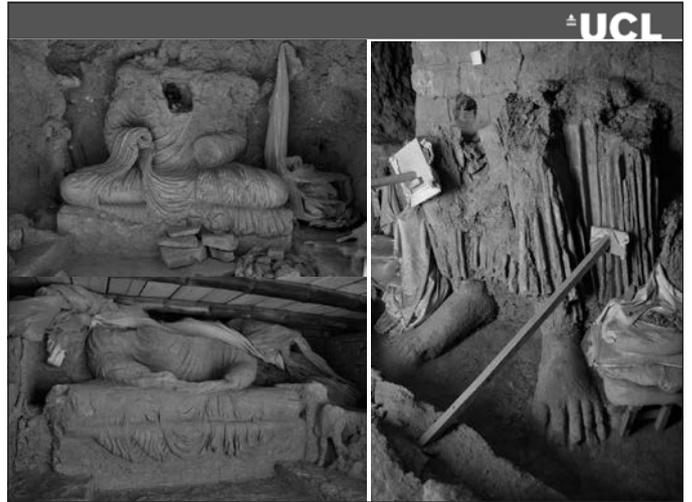
- アショーカ王碑文
- アショーカの3大碑文
アフガニスタン
現ラグマン近辺

カンダハール碑文



メス・アイナク、アフガニスタン





UCL

パルティア: 紀元前3世紀頃

アショーカ王碑文13
 仏僧の派遣

“これらは、ギリシャのアンティオコス王が統治していた600由旬(注1)も離れている国境、プトレマイオス、アンティゴノス、マガス、アレクサンダーの4人の王が統治していたコーラス、パーンディア、そしてタムラパルニ川に囲まれた南部の地も同様に成果を上げた。

マードン、パキスタン

パルティア使節団はドゥッタ・ガマニ王(紀元前108-77年)によって開かれた結集(注2)に姿を現し、その旨はマハーワンスのセイロン大年代記に記録されている。

注1 古代インドの長さの単位
 注2 仏教の経・論・律をまとめた編集会議

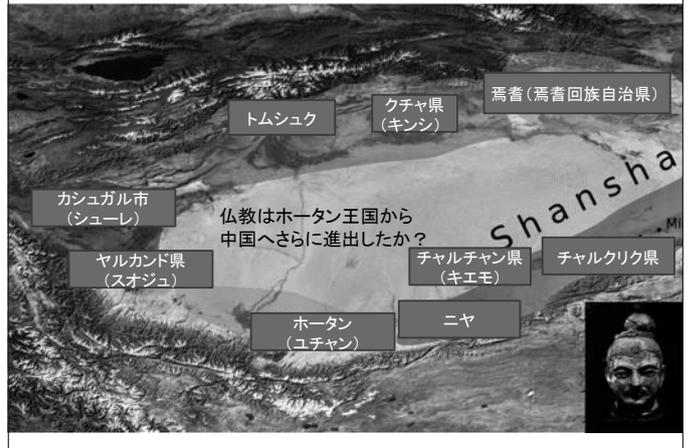


ホータン王国、新疆ウイグル自治区南部

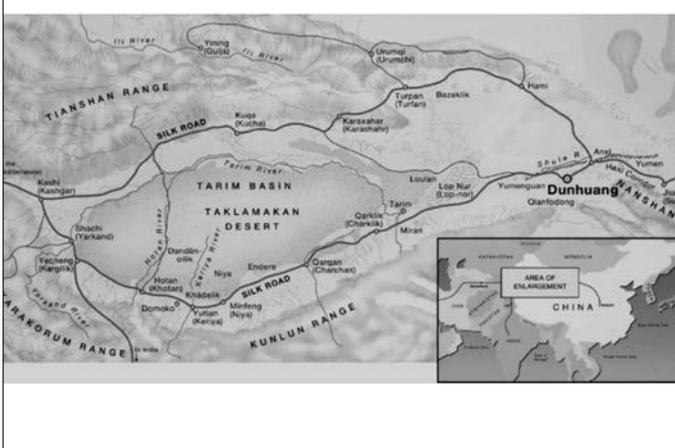


- ・ パキスタン北部・インド北西部から渡る
- ・ チベット年代記に基づく仏教の伝来 (紀元前84年)

中国への広がり

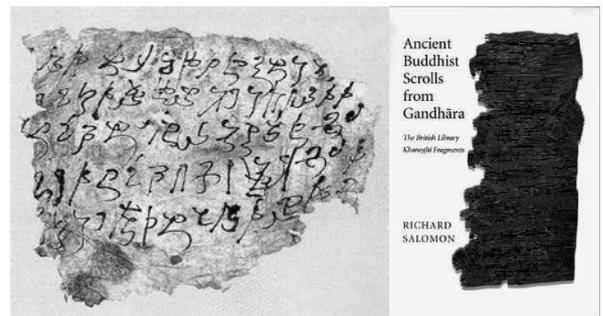


中国



経典の翻訳

- ・ プラークリット (非サンスクリット語) のカラーシュティー文字から中国語への最初の翻訳 - インド北西部、パキスタン、アフガニスタン地域



より現実的な年表

- ・ 紀元前3世紀 - ガンダーラ・アフガニスタンへ
- ・ 紀元前2世紀 - バクトリアからパルティアとソグディアへ
- ・ 紀元前1~2世紀 - 匈奴
- ・ 紀元前1世紀 - ホータン王国
- ・ 紀元前1世紀 - 中国



日常的に交易、外交、軍事関係のある近隣諸国へ思想が伝播するのに、本当に数十年、数百年の月日が必要であったのか？

シルクロードの伝達

UCL

- ・ 各地への交通網を確立したシルクロード
 - 人々の移動
 - 人々の移動とともに、思想の伝播
- ・ エリート層の交流による伝播（統治者 / 国の支援者）もしくは僧侶？
- ・ エリート層（宮廷から宮廷へ）もしくはサブエリート層の移動？
 - 適応と私有の異なるパターン？

仏教寺院への経済的援助

UCL

- ・ 寺院と芸術への援助は、シルクロード沿いの政治的・経済的の規模の一つの指標
- ・ 庇護、もしくはその欠如は、地域に強固な地盤を築くための障害になるか？
- ・ エリート層支持者のゆっくりとした受容は問題であったか - 寺院コミュニティへの初期の投資を抑制した？



タフテ・バヒー、パキスタン

速度と拡散に基づく理論

UCL

- ・ クシャーナを除く中央アジア西部における国家的支援の欠如が拡散を妨げていた可能性

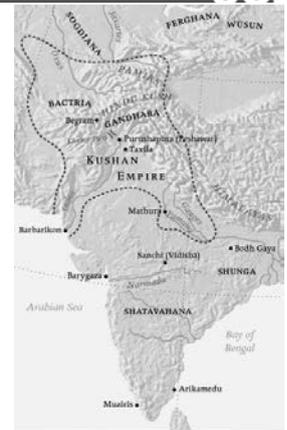


The Kushan Empire, 100 AD

ガンダーラ / クシャーナ

UCL

- ・ ガンダーラ王朝、現在のパキスタン北部、アフガニスタン東部とタジキスタン所在した。特にペシャーワル渓谷、ポソハル高原、カプール川渓谷において
- ・ 仏教のクシャーナ朝王支配の下、1~5世紀に絶頂期を迎えた
- ・ カピサ（バگرام）に首都、プシュカラヴァティ（シャーサッタ）、タクシャシラ（タクシラ）、ブルジャブラ（バシャーワル）
- ・ ガンダーラは仏教の中心地、及び中央アジア・中国へ信仰が伝播するルートとなった。



----- Approximate greatest extent of the Kushan Empire

ガンダーラ / クシャーナ

UCL



上: 要塞都市 (ギメ東洋美術館)

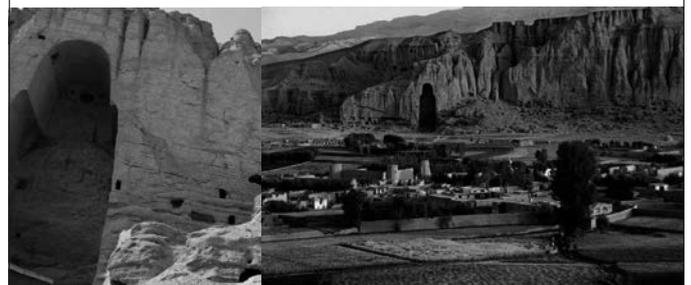
5~6世紀
アフガニスタン
(ハッタと推定される)

ブッダ (1~2世紀)

パーミヤーン、アフガニスタン

UCL

- ・ 3~8世紀における仏教の中心地
- ・ コロッシの起源は6世紀に、寺院遺跡の起源は7~8世紀に遡ると推定される
- ・ ササン期の影響が芸術に現れる



メルブ遺跡 △UCL

- AD75年 都市の中の寺院と仏舎利塔



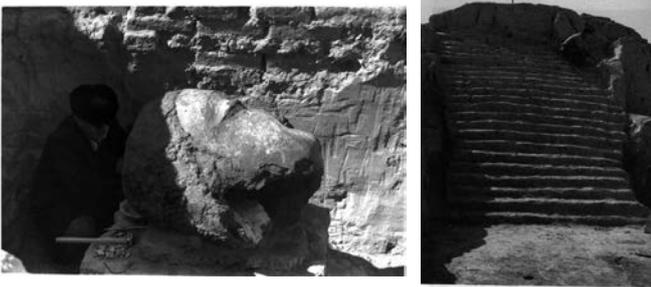
メルブ遺跡 △UCL

- 1960年代にYuTAKEのメンバー、M.E. マッソン、1970年代G.A コシエレンコ、後にZ.I ウスマノヴァにより発掘された。



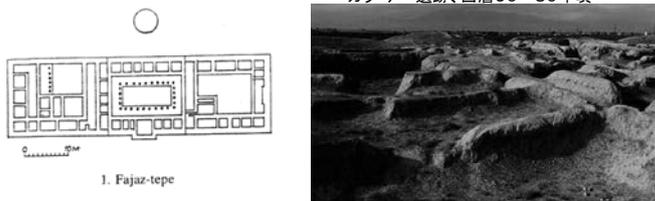
仏舎利塔 △UCL

- シルクロードで発見された最も西に位置する仏舎利塔
 - 建設は4段階で行われた
 - 直径10メートル以上に及ぶ円筒型
 - 14 x 13メートル 高さ3.5メートルの基礎を持つ



テルメズ、ウズベキスタン △UCL

カラ・テペ遺跡、西暦50~80年頃



1. Fajaz-tepe



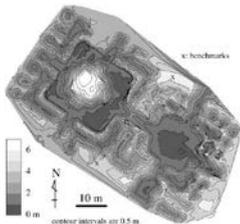
ファヤズ・テペ遺跡、1~4世紀



アジナ・テパ遺跡、タジキスタン



7~8世紀 修道院




アジナ・テパ遺跡、タジキスタン △UCL

- 近隣地域の建築技術と密接に混合した中央アジア建築の技術を体現
- サーサーン期建築の考察
 - フィルザバード大宮殿の類似物:
 1. 規模(50対100、55対103.5)
 2. 二つの部分による建設
 3. イワズの使用
 4. 左右対称性を備えた縦軸に沿ったプランニング
 5. ドームに繋がる吹き抜け通路

古代の世界の交易ルート: 仏教寺院遺跡



携帯可能な芸術品



(左) 箱の蓋: 渦巻き状の葉模様で囲まれた動物は北アジアで発見されたモチーフである



(左) 豪華な装飾物は中央アジアへの交易ルートにより運ばれ、ホータン王国の土地ビアルマにおいて葉物語 (foliate tale) のガチヨウなどのイメージの源となった



(右) 持ち運びできる祭壇: 5～6世紀 (ガンダーラ)

玄奘三蔵 [602～664年]



- ・ 627～643年の間に旅をした
- ・ 中央アジアの所々で壊滅的状态となった仏教記念碑
- ・ なぜ? 庇護の問題?
- ・ 他の宗教の発生が関係している?



報告5. サム・ニクソン

「西アフリカへのサハラ横断交易ルートにおける信仰の遺産: タドメッカ (マリ共和国) の南サハラマーケットにおける初期イスラムの景観」

大変ありがとうございます。我々は明らかに地理的に大きく移動しますが、話を少し違った形で始めたいと思います。世界の宗教における世界的な視点といった点に関して、です。つまり、海から移動して、明らかにティムはすでに我々を人間が作ったルート、砂漠の中に、連れていってくれましたが、明らかに、この件について、少し違う形で考えるのに役立ちます。というのも、人はしばしばラクダを砂漠の船と呼びます。それをちょっと心に留めていてください、オアシスはある意味で島々として捉えることができるようです。

我々は西アフリカにおけるイスラム教の伝来を広範な問題としています、ここでは、サハラ砂漠の最古の街のひとつにおけるイスラム教の伝来という特定の事例を通じて見ていきます。ここでは、私はそこでの我々の仕事のいくつかの要素に焦点をあてます。

サハラ交易に関しては、これは主に、西アフリカの鉱山の信じられない程の富に関連して発展しました。そして、南米の金が発見される以前では、旧世界で知られていた最も豊かな金鉱が西アフリカにありました。これらの交易ルート、ローマ時代中の実際のイスラム前の交易についてはまだ、ほとんど知られていません。イスラム前の時代にサハラ砂漠を横断する交易関係の証拠はいくつかありますが、まだ非常に断片的で、ほとんど知られていません。7世紀ごろの北アフリカへのイスラムの伝来とともに、7~10世紀において、サハラ砂漠を越えた交易と金鉱の開拓はかなり増加しました。皆さんちょっとみていただきたいのですが、相当量の考古学調査が、膨大な量ではありませんが、これらの街のいくつかに焦点をあてて行われています。それは、本日、私がお話ししようとしている、タドメッカです。

西アフリカへのイスラム教の伝来、いわゆる7世紀から、そしてそれに続く3世紀ほどの北アフリカへのイスラム教の伝来について、ごく簡単に述べたいと思います。北アフリカは実際一種の形成地域であり、今

日私が主にお話しする地域です。社会文化的背景の面において、これは実際に、砂漠を渡って移動するある種の聖職者、個々の交易による伝来です。当時、西アフリカにおけるイスラム教の伝来の非常に強力な庇護はありません。非常に重要なことは、イスラム教の多数派ではない、小さな宗派の一種であるイスラム教イバード派が支配していたことです。ですから、砂漠を超えて西アフリカで初期の時代に取り込まれたイスラム教は、当時の正統派の因習的なイスラム教ではないことは非常に興味深い事実です。

当初、イスラム教は南部サハラの周辺、それらの交易都市に限定されており、その後初めて、さらに南下し、それらのより大きな遊牧民環境の中で孤立していました。ですから、今一度、それを島々として考えます。西アフリカにおける初期国家の王都で、ガーナとガオ (Gao) の周辺で、これらの王都の隣にいくつか初期の小さなイスラム教の入植があったという歴史的文献と考古学的証拠があります。

11世紀から、実際に砂漠を越えてもたらされたイスラム教は、正統派のイスラム教ではなかったとの認識が高まりました。メッカやメッカ巡礼に行った際に、人々はそのに違った形態のイスラム教があることを認識し、そしてこれが西アフリカでの紛争の増加につながりました。そして11世紀にムラービトは、新しいより正統派なイスラム教につながる、聖戦に着手しました。その後、西アフリカの国王たちが改宗し、彼らの交易ネットワークは一層拡大しました。これが、大観的な意味での概要です。

15世紀までに、何千という巡礼者がメッカ巡礼のキャラバンからメッカに向かいました。タドメッカの街はこれらの初期の交易都市の一つでした。この町の名前は、実際、メッカのような、またはメッカに似ている、との意味です。ですから、そこにはイスラム教およびイスラム世界の実際的な種類の強い意識と、それらとの繋がりがあります。これが、この場所について考える際に心に留めなければならない、最も重要な点です。それは10世紀から15世紀と記録されています。私は主に初期についてのみお話するつもりです。ですから、そこでの我々の作業は遺跡の調査と発掘を行い、皆さんが期待する交易品のいくつかを見つける、そし

てまた金や金細工、金貨製造の証拠も見つけることで
す。しかし、この点については今日はお話しません。

現地におけるイスラム教の構造に関する考察の面
に関しては、遺跡を囲むイスラム教の銘刻のある墓石を
伴う一連の非常に多くのイスラム墓地があります。遺
跡の地表面に複数のモスクの証拠があります。その遺
跡の周りに、遺跡の北までのムサッラー（礼拝所）の
宗教建築がいくつかあります。しかし、私は主にこの
遺跡の銘刻に主に焦点をあてたいと思います。それで、
この遺跡には西アフリカでの国内最古の11世紀初頭の
碑文があります。遺跡周囲の磨崖の非葬儀碑文と周囲
の墓地での葬儀碑文の両方があります。この遺跡から
は非常に多くの証拠が残されています。この文脈上の
証拠を持つことは非常に稀であり、そして、それは皆
さんにある種の具体的な感覚を提供し、この地域にお
けるイスラム教の到来を考えるための良き窓を再び開
くと思います。

この地域における碑文研究ですが、このように伝統
に則して文章が記されている重要な理由の一つは、ベ
ルベル語固有の文章、ティフィナグ文字の文章に重要
な伝統があるからだと言えます。この二つの間には密
接な関係があるため、これはティフィナグ文字で、ちょ
うど一番上にあるのがティファナグ文字とアラビア語
の文章の例となっています。この二つの文章の発達に
はとても緊密な関係性があります。これはティファナ
グ文字の例です。一種の落書きのようなもので非常に
シンプルな例です。「私だよ、アーリダル、ここに
いるよ」。本当に簡単な内容となっています。多くはこ
の落書きのようにとてもシンプルな形です。しかし実
際には落書き以外の形も証拠として残されています。

その証拠の重要な形式の一つとは、日付に言及して
いることです。遺跡全体にわたり、現存している碑文
には、通常イスラム暦を用いた非常に正確な日付が記
されています。実際に日付だけを記したのも残って
います。例えば「ヒジュラ歴では今年は4と400」の
ようになっています。つまりイスラム暦の体系知識
を公布するようなものであり、イスラム暦を世界と関
連付けるという類の宣言でもあるのでしょうか。世界中
のイスラム教徒のネットワークを特定するためのある
種の機能を果たしていると言えます。

また、これはこの地を統治し区別する目的を持つ、
イスラム教の儀式や慣習に対する洞察力を与えてくれ
る証拠でもあります。この場所の周辺にはこういった
崖があり、入口は数カ所あります。これはその入口の
例の一つです。この入口ですがこういった碑文があり、
読んでみると主にイスラム教の信仰告白を暗唱するよ
う求めています。暗唱する回数はここに書かれていま
す。実際には町に入る前に、1行目にある文言「アッ
ラーフの他に神は無し。」を40回、2行目は20回暗唱
するよう申し付けられており、それから、これを記し
た人物が誰かを伝えています。これは町の玄関のよう
なものであり、暗唱することで自分がイスラム教徒で
あると宣言しているのです。更にここはイスラム教徒
の土地で、市場都市であり、とりわけイスラム教徒の
市場都市ですよという場所の識別情報も伝えています。
暗唱する行為で、その違いを認識するよう求めら
れているのです。

またこの伝統は、ベルベル人固有の伝統という観点
から見れば、この地域での既存の伝統と暗唱の繰り返
しには関連性があるとされています。

墓碑に関しては、この様に多くの墓地で碑文が刻ま
れています。その碑文が刻まれた墓石も様々です。コー
ランについて述べてあったり、そこに関係する人々の
生活、時には非イスラム教徒の信念体系、特定の個人、
月に関して、などに触れています。とても多種多様で
あると言えます。何も書かれていないお墓や象徴、碑
文が刻まれていない墓石とは明らかに一線を画してい
ます。

最も重要な巻の一つで、間違いなく最も重要な碑文
はこの場所に刻まれています。タドメッカの碑文は
メッカに関連付けてこう刻まれています。「これはカ
マディンの息子イリヤによって記された。メッカに倣
い市場を維持し、本を残す」。つまりこの碑文はこの
遺跡に元々あり、碑文が刻まれた正にその同じ時代の
ものと想定できます。これは、明らかにメッカと一体
化していて、さらにより広いネットワークを繋ぐ結果
となるのです。

しかし本当に最も重要なのはこの町や、この地域に
ある他の二、三の町が巡礼の中心地としての重要性を
もって機能し始めたという事実です。何と言っても当

時のイスラム世界の最果ての場所だったので。メッカに類似したこの発展の仕方は、実際にメッカ特有の形と酷似しています。イスラム教徒のネットワークをより大きなものとして捉えるよう考え方を改めてみた、非常に興味深い例です。

西アフリカの初期イスラム世界への見解を少しお伝えしますと、タドメッカでは後に、より主流派のイスラム教が普及しましたが、その初期の時代は間違いなくイバード派と結びついており、これらの碑文を通じて多くの人々がより広範囲のネットワークを持ち始めたこと、そしてまた、これまでの伝統全てを捨て去ること無く、この新しい信仰が既存の伝統とともにどのように受け継がれていったのかお分かりいただけるかと思えます。

あらためて強調しますが、イスラム教、イスラム教イバード派の周辺的運動といえるこの当初の導入活動については、我々の理解し得る範囲での、過去の調査、当時の人々の見識、非常に限られたコミュニケーション

ンしかできない世界での宗教知識を考えることがとても重要だと思います。この地域では何世紀もの間、実際にイスラム教イバード派をイスラム教の主流派として扱っていました。イスラム教の中心地において、宗教形態が違う方法で慣習化されている、という現実にはぶつかったのは11世紀の後半になってからでした。しかし、この違いは、東アフリカでのイスラム教の発展に関し、遺跡の既存の慣習が、とりわけティフィナグ文字とアラビア語の関係性において、実際どれくらい強い影響を与えているかを示す非常に良い例なのです。またこれら東アフリカの地域がイスラム教の発祥地としてどのように認識されているか考えてみると、巡礼の中心地として後の歴史の中で、大変重要な地域としての役割を担い始めたことがわかります。タドメッカがメッカに似ているという見解は、イスラム教の中心的な場所の代替として機能できたということでもあります。ありがとうございました。

西アフリカのサハラ横断交易ルート上における信仰の遺産:
 タドメッカ (マリ共和国) の南サハラマーケットにおける初期イスラムの景観
 サム・ニクソン
 世界考古会議 8月28日～9月2日 (京都)

SAINSBURY INSTITUTE
 Centre for Archaeology and Heritage
 UEA University of East Anglia

サハラ横断交易の歴史と考古学

西アフリカにおける初期イスラム文化: 8～11世紀

社会的・文化的状況
 ~ 貿易商人と聖職者
 ~ 北アフリカのベルベル人移民/アラブ人と改宗したサハラベルベル人
 ~ イスラム教イバード派による支配

地理
 ~ サハラ南部の外れに対する初期の制限
イスラム文化初期における砂漠の果ての街
 ~ アウダガースト & タドメッカ
 ~ 非イスラム遊牧民内で孤立
王都近辺へのイスラム教の定着
 ~ ガーナ及びガオの首都近くに位置する

ヤアクービー(西暦872-3): "ワダン以南はザウイラの街です。全ての人々がイスラム教イバード派を信仰し、メッカへ巡礼に行きます。"

西アフリカにおけるイスラム文化の広がり: 11～16世紀

主要因
 ~ イスラム教スンニ派による聖戦 (11世紀～ムラービト期)
 ~ 西アフリカの王たちの改宗 (マリ、ソングアイ帝国)
 ~ 先住イスラム教徒貿易商人の増加/聖職者のネットワーク

地理
 ~ サハラの外れから森林地域端への南下

アル=マクリースー (西暦1442年以前):
 "[1344年] 巡礼者たちはアル・ビルカを発ちました。10,000人以上のマグリビ巡礼者が訪れ、うち約5,000人が西アフリカタクルーの地から来た人たちでした。"

マリ王国の支配者マンサ・ムーサを示すカタロニア地図(1375年)

スーク・タドメッカの問題

"バグラーからティラッカへ向かい、そこから全ての街が世界で最もメッカに似ているタドメッカへ繋がる砂漠を渡ります。タドメッカの意味は、"メッカのような"。山と谷に囲まれ、ガーナやカウカウよりよく作られた大きな街です。タドメッカの住人はイスラム教徒のベルベル人であり、砂漠に住むベルベル人のように自身をバールで隠しています。彼らのディナール(コイン)は印のない純粋な金でできているため、"hald (バールド)"と呼ばれています。"

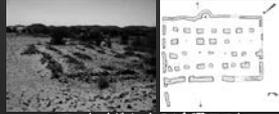
道路と王国の本、1068年、アル=パクリー

遺跡と調査の概要

ムスリムの墓地、モスク、礼拝所 (エスーク・タドメッカ)



廃墟となった街を囲む墓地



エスーク・タドメッカの'金曜'モスク



エスーク・タドメッカから北向きに祈りを捧げる礼拝所

イスラム文化初期の墓碑銘(エスーク・タドメッカ)



日付が記された西アフリカ最古の文字
(11世紀初期)



アラビア語が刻まれた墓石
(エスーク・タドメッカ)

アラビア語とティフィナグ文字の関係 (エスーク・タドメッカ)



タドメッカで発見されたティフィナグ文字の例(先住ベルベル人の文字)



ティフィナグ文字とともにアラビア語の碑文
(タドメッカ)

エスーク・タドメッカ: ティフィナグ文字で記録された例
“私だよ、アリーダ、私はタクルー(既に使用されていない土地名)にいるよ。”

‘落書き’としてのアラビア文字

- 非葬儀用の碑文は内容が限られ、芸術性も乏しい。
- アラビア語の碑文は、多くはシンプルな内容であり、ティフィナグ文字を併せ持つ。



アラビア語の碑文とイスラム暦

- 碑文には正確な年代が共通して使用される。
- 日付だけを記した碑文の例
- 世界中のイスラム暦との一体感



“今年は、4と400。
[ヒジュラ暦]。”

イスラム教の儀式と信仰

- イスラム社会の概要を定義し統制するためのアラビア語の碑文の使用
- イスラム教の信仰儀式が既存の伝統儀式に影響を受けた可能性



アラビア語の暦碑文(右側)。
イスラム教の祈りの言葉の暗唱の手引きが書かれている。

“アッラーフの他に神はなし。40 [回] //
ムハンマドは神の使者である。20 [回] //
これはアーマッドにより書かれた//
アラウ、すなわちサシッドの息子である。

イスラムの墓碑銘

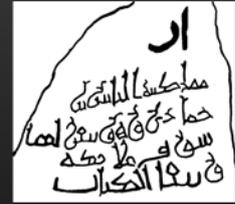


- ・エスーク・タドメッカの伝統にもとづき高度に刻印された墓石
- ・コーランの資料、個人の生活の資料、また時に非イスラム教徒の信仰状況に関する資料
- ・無標の、もしくは単に何も刻印されていない墓石についてのムスリムの理想からの出発（神を祝福するのはどちらか一方のみでなくてはならない）

メッカとの一体性



アル＝バクリー(1068年): “山と谷に囲まれた大きな街で、全ての街が世界で最もメッカに似ています。”



日付のない崖の刻印(タドメッカ):
“これはカマデインの息子イリヤによって書かれました。市場はメッカとともに(僅れとともに)そこに残ります。そして、本[コーラン]もまた残り続けます。”

結論

- ・イスラム教イバード派の二次的な動きと言える早期導入により、現地において主流派のイスラム文化であると認識されていた。
- ・西アフリカにおいて、現地の既存の信仰習慣はイスラム教初期の信仰習慣に強い影響を与えた。
- ・イスラム教發祥の地と特定された西アフリカ地域はその地域におけるイスラム文化と巡礼の中心地となった。(タドメッカ = “メッカとの類似性”)



主な共同研究パートナー

- ・UCLインスティテュート・オブ・アーキオロジー/UCLカタル(ケヴィン・マクナルド; スイロ・レーレン; ドリアン・ブロー; マリアンヌ・ムレー; ステファニー・グラーグ)
- ・バーミンガム大学(パウロ・デ・モラウス・ファリアス)
- ・フランス博物館保存研究センター、パリ(マリア・フィロメナ・ゲッラ);
- ・フィールド自然史博物館、シカゴ(ローレ・ドゥスビュー)
- ・アリゾナ大学 地学・惑星科学研究所部門(トーマス・フェン)
- ・カリフォルニア州立大学、サンバーナーディーノ(ピーター・ロバートシャウ/マイケル・グラスコック)
- ・フランス国立科学センター考古発掘物研究所、オルレアン(ジェームス・ランクトン)
- ・ブリュッセル自由大学、ラ・カンブル建築学科(ブノワ・スザンヌ)
- ・探鉱・仮想考古学ルドウィグ・ボルツマン・インスティテュート、ウィーン(クリス・セヴァラ)
- ・英国考古遺産センター フォート・カンバーランド(ジェーン・シデル)
- ・EHES-CRH(歴史研究センター)、パリ(ソフィー・デロシエール);

謝意

実地調査許可及び支援:

国立文化遺産研究所、人文科学研究所(マリ)

実地調査資金提供: ユニヴァーシティー・カレッジ・ロンドン、芸術人文リサーチカウンシル/UCLインスティテュート・オブ・アーキオロジー、ロンドン大学セントラルリサーチファンド

分析用資金提供: 年代測定AMS法は、自然環境リサーチカウンシル(NERC)/AHRCオックスフォード放射性炭素年代測定サービス(ORADS) イニシアチブ(ORADSプロジェクト 2005年2月5日)より支援を受けました; 銅合金の化学物質と同位体分析、米国立科学基金はDGE-0221494 and BCS-0852270(デイヴィッド・キリック/トーマス・フェン)に資金提供しました; ガラス玉の化学的分析、米国立科学基金はBCS-0209681(ピーター・ロバートシャウ/マイケル・グラスコック)に資金提供しました。

参考資料

- ニクソン, S. (編集者) 出版間近. タドメッカ: 南サハラにおけるイスラム初期の貿易都市. アフリカ考古学モノグラフィーズ 新編(アフリカ)カマナヴァアニア
ニクソン, S. 2016. マリ共和国 エスーク・タドメッカ遺跡: サハラ南部における初期イスラムマーケットタウン. 国学研究 (6月号)
レーレン, T., ファルシー, C., ニクソン, S. 出版間近. マリ エスーク・タドメッカにおける初期イスラムのつぼ銅製造. 考古科学新聞(提出), 49: 33-41.
レーレン, T. & S. ニクソン, 2014. ガラスで壺を精製する - マリ タドメッカにおける初期イスラムの技術. 考古科学新聞, 49: 33-41 [オープンアクセス]
ニクソン, S. 2013. タドメッカ: 旅する初期サハラ横断商人街の考古学. アフリカ 04 <http://afriques.revues.org/1237> [オープンアクセス]
ニクソン, S., M. フィロメナ・ゲッラ & T. レーレン. 2011. 西アフリカにおけるイスラム初期の黄金貿易に光を当てる: マリ, タドメッカの貨幣鑄造. 古代, 85: 1353-1368.
ニクソン, S. 2010. トンブクトゥ以前: タドメッカの大貿易センター. 現代世界考古学 39: 40-51.
ニクソン, S. 2009. マリ エスーク・タドメッカを発掘する: サハラ南部横断初期イスラム貿易事情の再考古学探求. アフリカの考古学研究, 44 (2): 217-255

報告6. ガミニ・ウィジェスリヤ

「宗教的価値と聖なる世界遺産の保存管理における顕著な普遍的価値を両立する」

主催者の皆様、サイモン、お招きくださりありがとうございます。結局、この問題の中にあるのは何かということについて、私も引き続き探っていくのですが、最初に、導入と結論を読み上げてしましましょう。そのほうが、理解が簡単でしょう。

聖なる場所は、地域的、国家的、または場合によっては国際的な共同体と結びついた伝統的宗教価値の上に形成された有形・無形両方の表現を構成します。こうした聖なる場所の中には、「伝統的な」あるいは「定着した」管理体制の中であろうがなかろうが、進化する需要に応じて変化を受容し、また順応していく能力を持ちつつ、何世紀もの間、共同体に支えられて、連続と変化の類まれな混合を示しているところもあります。これらを保全と管理を目的とした遺産として指定するならば、今日の世俗的価値に根付いている現代の保全指針を利用して、新しい一連の価値が加わります。

さらに、国際社会は、顕著な普遍的価値(Outstanding Universal Value)、それをOUVと言いますが、その顕著な普遍的価値を、主に有形の遺跡に注目し、選ばれし世界遺産リストに登録して、遺産として指定される聖なる場所として考え始めました。このプロセスは、先に触れた現代の保全指針の中で育まれてきた新しい一連の価値を導いたのです。この場合、管理それ自体は、顕著な普遍的価値に欠かせない部分であるというだけでなく、顕著な普遍的価値を守るために欠かせない義務的要件でもあるのです。しかし、実際には、世界遺産に登録されたところも含め、遺産として指定されたこうした場所はいまだに、伝統的な管理体制を含めた資産の伝統的宗教価値を保持しています。多くの場合、これは、潜在的な対立状況を構成しています。なぜなら、価値システムと保全・管理アプローチは異なる二つの世界観にそのルーツがあるからです。

しかし、世界遺産に関して言えば、それぞれの政府は顕著な普遍的価値を守らなければならない法的義務を負うのだから、唯一の選択肢は、顕著な普遍的価値が広まることを確保しながら微妙なバランスをとるこ

とだという議論もあるでしょう。しかしそうではなく、私は、この問題は信仰と保全を「バランスをとる」のではなく「調和させる」挑戦の一つであり、世界の二つの異なる見方を考慮に入れているということを申し上げたいと思います。また、聖なる場所は特別な場所であり、それ故、特別な注目に値するものであり、宗教的価値は、たとえそこが顕著な普遍的価値の場であっても、他の価値を超越するのだということも申し上げておきます。もちろん、調和に抵抗するたくさんの障害物があります。

「沖ノ島と関連遺産群」は聖なる場所のよい事例です。皆さんはすでにお聞き及びですので、私からは、ここは、自然崇拜に端を発しながらも、地域の信仰、慣習、伝統、そして習慣を統合しながら地域一体に伝えられた信仰体系と融合することで実質的に変化していった場所であるということだけ申し上げておきます。この場所には自然要素と同様に有形・無形の文化的遺跡もあります。価値体系は宗教的信仰を通して発展し、長期的な手入れは制限やタブーを含め伝統的体制に定着しています。ここは国家的遺産であり、今や世界遺産リストの候補でもあります。よい結果を祈ります。

世界にはこうした場所がたくさんあります。その中には、仏教の伝播と関連したものもあります。紀元前6世紀、インドの菩提樹の下でブッダが啓発を受けたのち、樹木崇拜が確立しました。紀元前3世紀にその若木一本がスリランカにもたらされましたが、それはいまだに最も神聖な崇拜の対象の一つです。もちろん、それはこの場所、つまりインドのブッダガヤから来たものですが、ブッダガヤのその一本の木は19世紀に破壊されてしまい、結果的に、新たな一本の若木がスリランカから逆に送られました。ブッダガヤで皆さんが見るのはスリランカから送られた一本であり、両方の場所とも今は聖なる場所であり、仏教徒のための場所であり、またもちろん世界遺産リストにも載っています。皆さん良くご存じのように、両方ともテロリストのターゲットとなっていました。ブッダの歯は紀元4世紀に保護を目的にスリランカにもたらされました。爾来、有形・無形の調査研究を作り出し、最も神聖な崇拜の対象の一つとなりました。もちろん、取り上げ

るつもりはありませんが、国家権力とかそうした類のことを申し上げているのですよ。神聖なブッダの歯を所有している人物の一人が当該国家の王だと信じられていました。それが権力なのです。イギリスの植民地支配者でさえ、イギリスの国王に手紙をしたためるとき、権力の存在のようなものを感じたわけです。

今ここで、そのことに詳しく踏み込むつもりはありません。私たちのように保全を実践する者は、どこでも通じるような原則に従うよう余儀なくされるため、地域状況に対応するのに苦労します。まず自分自身の話を見せてください。私はスリランカで20年間、保全機関の代表を務めてきました。仕事の75パーセントは宗教的遺産でした。ご存知の通り、国によっては宗教的遺産を法的枠組みに取り入れないところもあります。どのような仕事をこなしていたか申し上げますと、例えばこちらはブッダの像で、自立します、菩提樹の高さの三分の一あります。西洋で訓練を受けた保全実践者として、今でも思い出すのは、仏教僧との仕事での衝突です。私は、ベネチア憲章やその他の文書にしっかりと則って、現代の保全原則を彼らに伝え、課そうとしました。実際、1964年のベネチア憲章と1945年のスリランカ原則をみると、修復の意義が比較できます。方針の中にすでに宗教的側面がありましたが、原則の全体を通して、調和は存在していました、しかし、私たちはバランスをとっているふりをしていたのです。

これがヨーク大学修士課程での私の問いのテーマでした。いまだに反論されてはいますが、自分としては、行間からメッセージは読み取れるものの、今の自分が論じているほど力強く、当時は論じることができなかったことを後悔しています。私たちがこうしたものを世界遺産リストに推し始めたころから、批判がより大きくなりました。私は六つの文化的な世界遺産の場所を管理したことがありまして、うち四つは宗教的遺産です。

ご存知の通り、世界遺産条約では宗教的場所と非宗教的場所という区別をしません。場所はその顕著な普遍的価値を示すものでなければならず、その顕著な普遍的価値は現代的な保全指針の中で発展した同一価値体系の上に構築されています。そこには三つの柱があ

り、管理はその価値の不可欠な部分です。一度世界遺産リストに載れば、管理要件はさらなる様々な問題と呼ばれ込みます。すなわち、新たな規則、規制、新たな利害関係者、定期的な報告、中でもモニタリングのための監視者です。これらはすべて調和よりもバランスを目的としています。自国における信仰と保全という衝突を減らしたいという国のことが議論されていることを認めざるを得ません。世界遺産のあらゆる場面において先住民の共同体から事前同意、優先同意、そして情報提供同意をとることを必須とした、最近の規則変更は、非常に前向きなプロセスです。

スリランカでの職場経歴の最後の数年間で、私は西洋での教育を足場とし、自分の主張を強くせんと突き動かすその限界を理解させてくれました。これはブッダの歯が置かれている仏歯寺です。紀元1世紀のものですが、スリランカの仏教徒や世界の多くの人たちにとっても最も聖なる場所な場所の一つです。しかしあまり多くの人に知られていませんが、ここは、テロリストに爆破される最初の世界遺産になりました。この事件は1998年に起きました。その修復が、私が自分のアプローチを変えざるを得なくなった分岐点となりました。というのも、国の大統領が、保全の最終的結論は国の仏教界の指導者を務める二人の仏教僧によって下されなければならないと主張したためです。無論、私は、仏教僧で始まるというアプローチを変えただけではなく、地域での実践と地域文化の実践は国際的に決めた保全原則を超越することがありうるという結論に至ったのです。私の親友、ピーター・アッコーは、即座に素晴らしい哲学だと評価してくれました。私の資料を出版してくれた親友のニールですが、彼もこの本で言及しています。一番の強力なメッセージは、いかなる方針の決定についても、関係する共同体の声を認識することが必要であるということです。

ここでいくつかの例を挙げながら世界遺産の状況における複雑さに触れてみたいと思います。これはかつてのバグラティ大聖堂で、世界遺産に登録されていましたが、廃墟と化した大聖堂の修復を望む人々の声が上がりに、修復工事が実施されました。この結果、バグラティ大聖堂は世界遺産リストから抹消されました。こちらはカスピのブガンダ歴代国王の墓です。焼失さ

れたあと、すぐに復元工事が開始されました。もちろん工事は簡単なものではなく、数多くの専門家が関わり、様々な議論がなされるなど、完工までには6年間の歳月を要しました。世界遺産の規則によると例外的な状況であるという結論が出ていますが、誰が何を持って例外と規定するのか、いまだに議論の余地があるところです。

これはカトマンズの渓谷にある地震後のストゥーパ（仏舎利塔）です。頭頂部は崩壊しており、既に修復作業が開始されています。どの世界遺産の規則を持ってしても工事を中断させることはできません。

もちろん、これは私の母国でもあるスリランカでの例ですが、ご覧いただいているのは紀元前1世紀に建立されたストゥーパで、多くの仏教徒が訪れ、1940年頃には人々は非常に重要視しています。チャイティヤ（礼拝対象）に対してはブッダと同じに接するべきであるとするならば、ブッダに対する尊敬と敬意がチャイティヤにも払われるべきです。なぜ、修復工事に踏み切ったのかという人々の思いがここにあります。

もちろん私たち専門家は人々の声を尊重しなくてはなりません。この声に沿ったものが紀元前2世紀にガミニ王により建立され、その後修復されたストゥーパです。今まで見てきた例からわかることは、聖なる場所は人々にとって特別な意味を持つ「歴史的な遺産」となり、たとえ世界遺産になろうとも、宗教的な意味において最も重要であるという権威を失うことはないということです。聖なる場所とは何らかの制限と人的行為の禁止を示唆すると言った見解が示された、1992年の世界考古会議（WAC2）への質問内容でもあります。神聖なものに対しては、それにふさわしいルールを守るべきです。修復管理者はこの点を考慮していたかどうかの質問を投げかけるべきだと思います。

ICCROMは、現存する宗教的遺産に関するフォーラムを2003年に開催し、信仰と、保存のために行うべきことの調和を図る必要性、そして両者に数多くのギャップが存在することを明らかにしました。ここで

詳しくは述べませんが、その他にも、古代仏教の遺産保存を支援するセッション、現存する遺産に対するICCROMプログラムなどの取り組みをおこなっています。世界遺産の状況においては、文化的景観について聖なる場所、自然遺産、自然における聖なる場所が挙げられます。ユネスコはアジア太平洋の聖なる山をテーマとした専門家向けの会合なども開催しています。

世界遺産を取り巻く現在の状況にあって、もちろん、宗教的な遺産に対するプログラムもあります。幾つかの事例に詳しく触れながら、聖なる場所における課題が長く認識されていることを示すべく、この現在進行形の議論を述べてきました。それでも、対立する両者の利害関係の「バランスを取る」以上に何をすべきかと言うことに対して、明確な解決には至っていません。

結論としまして、導入部分で触れたように、聖なる場所は遺産として指定され、あるいは世界遺産のリストに挙げられ、伝統的な宗教的価値が保たれています。その価値、保存と取り決め項目という状況にさらされ、対立を引き起こす可能性が混在している地域が新たに生まれる結果になっています。対立を解消するには、宗教的価値とルールが全てにおいて優先される必要があります。バランスをとるのではなく、信仰と保存の調和を進めていくことを提唱している理由がここにあります。沖ノ島のような場所では、伝統的な管理システムを含めて、伝統的な宗教的価値は管理体制に不可欠なものであり、世界遺産に登録された後にも、全てにおいて優先されるべきことです。障害もありましょうし、先ほどの例でも一部挙げたように、変化に対する抵抗も地元にはありましょう。現代の保存に関する議論を牛耳っているのは、いまだに、保管されている文書や世俗的な価値観がもたらす原則であり、聖なる場所にその主導権が委託されることはありません。調和をとるプロセスに至ることができるのか疑問の残るところであります。ご清聴ありがとうございました。



宗教的価値と聖なる世界遺産の保存管理の
顕著な普遍的価値を両立する

ガミニ・ウィジェスリヤ

修復される部分の一次的、もしくは二次的な要素
が認識される寺院の修復にあたっては、それ自体
の材料を用いることを必要とする。

もし欠損やヒビなどがある場合は、修復しようとす
るが、その時は完全性を取り戻し、改めて適切に
配置されるように進められなければならない；

装飾や、角や他の付属する小さな祠なども含め、
(当時存在していたありのままの姿に)何も付け加
えることなく、当時と同じ規模(高さと横幅)でなけ
ればならない

常に専門家の指示に従うこと



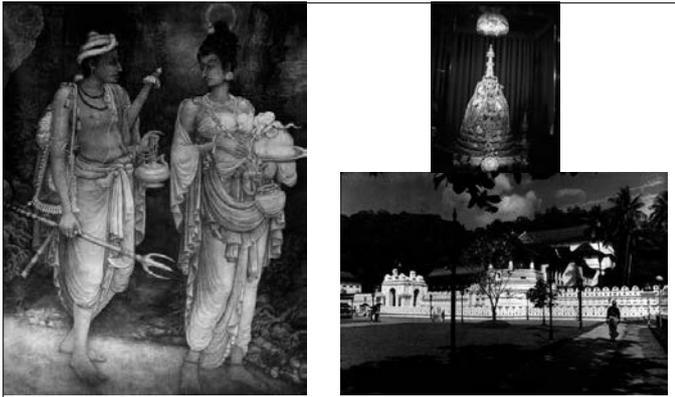
アヌラーダプラ - スリランカ



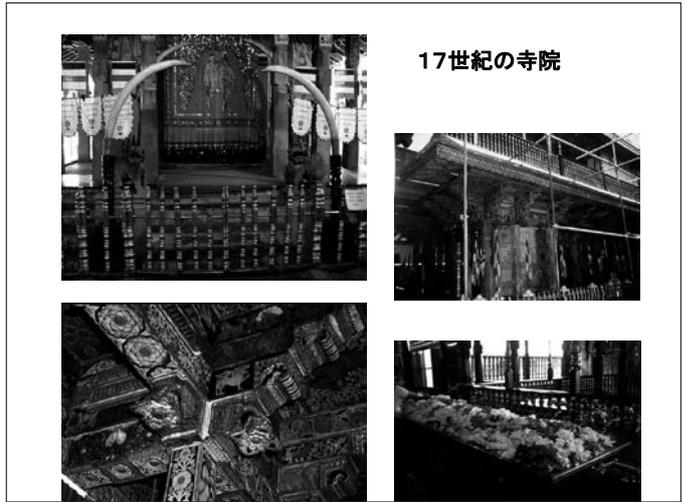
ブッダガヤ - インド



テロリストによる攻撃
アヌラーダプラ ブッダガヤ



4世紀頃、スリランカへもたらされたブツダの歯の遺品



17世紀の寺院



年中行事



寺院の復元



崇拜対象の復元



仏像の修復



復元の原則

ヴェネツィア憲章 1964

- 復元の目的は、記念建造物の美的価値と歴史的価値を保存し、明示することにある。

スリランカ 1945

- 寺院遺跡の復元は人々の宗教的感性を傷つけることなく行われるべきであり、また管轄部門による介入は人々が持つ既存の利益と宗教的権利を害してはならない。

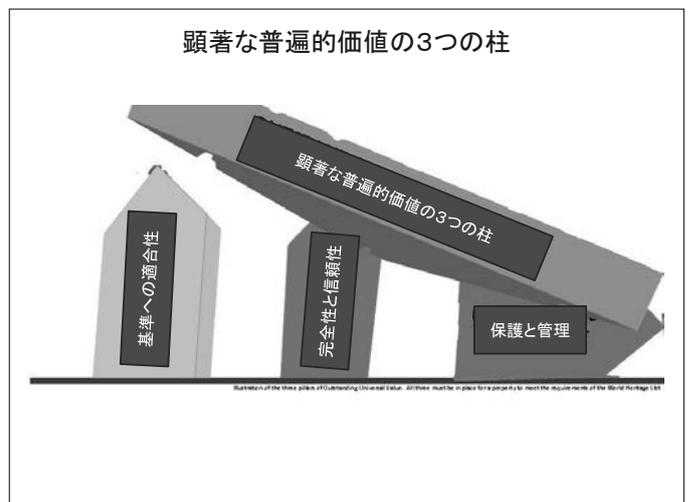
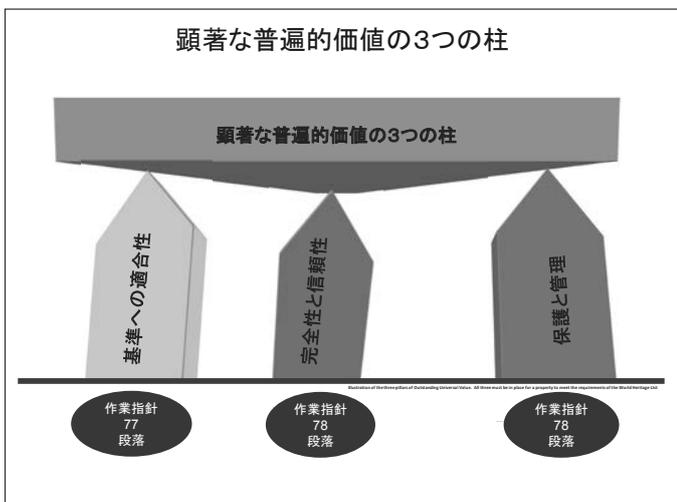
INTERNATIONAL
SCIENTIFIC SYMPOSIUM
10th General Assembly
Sri Lanka

ARCHAEOLOGICAL HERITAGE
MANAGEMENT SUPPLEMENT

THE RESTORATION OF BUDDHIST MONUMENTS IN
SRI LANKA: THE CASE FOR AN ARCHAEOLOGICAL

スリランカにおける仏教建造物の復元：
考古学遺産管理戦略の例

ICOMOS
CONSEIL INTERNATIONAL DES MONUMENTS ET DES SITES
INTERNATIONAL COUNCIL OF MONUMENTS AND SITES





スリランカの仏歯寺

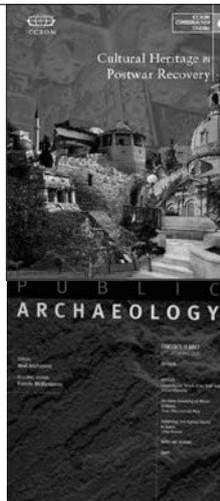


1998年1月の爆撃被害

地域文化の実践は、国際的な保全原則を超越することがあり得る

「素晴らしい哲学だ」
(ピーター・アッコー)

「全ての保全についての議論はこの経験から見直されるべきである」
(ニール・アシャーソン)



バグラティ大聖堂とゲラティ修道院 (ジョージア)



ソース:世界遺産委員会

バグラティ大聖堂とゲラティ修道院 (ジョージア)



©世界遺産委員会



ブガンダ歴代国王の墓(カスピ)
2010年3月16日、132年前に作られた王家の墓が燃やされた



ブッダの仏舎利塔

地震後
ネパール カトマンズ渓谷




地震前

ピアウス・ヴァンダルズ (スリランカ)




1940年以前
1940年

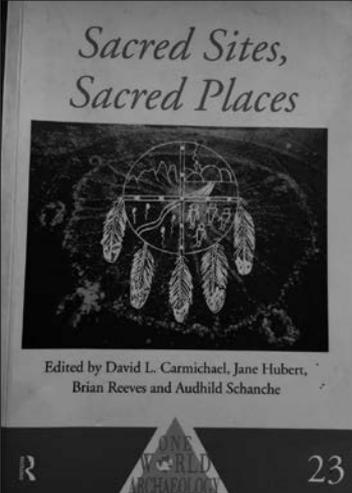
セティヤ (仏舎利塔) は、生けるブッダのように扱われなければなりません。人々はブッダに対して尊敬と敬意を払いますが、セティヤに対しても同様です。
(ラフラ1956年)



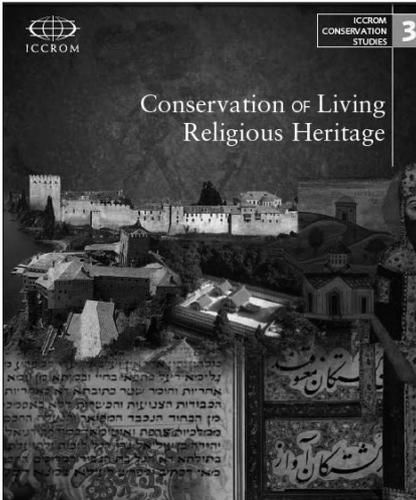


1870

スリランカ: 紀元前2世紀に建てられた仏舎利塔: 1993年、専門家の手により復元された



「神聖という概念は、人間の行為に制約と禁止を示唆する—もし何か神聖であるならば、何らかの習慣が観察されるはずである……。」

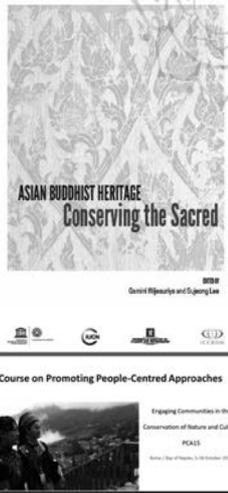


信仰と保全が調和するための必須要件

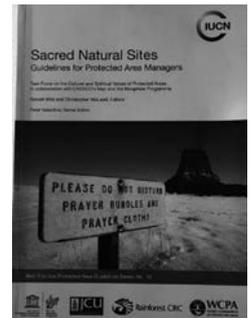
ICCROMフォーラムより

- 人間の生活に意義、そして目的、崇高なアイデンティティーを与える信仰を伝達、表現、維持することは極めて重要である。
- 有形の宗教的な品々、建造物、場所の無形の意義を評価することが、それらの意味を理解するための鍵である。
- 信仰への敬意は時に保全において制約、規制、排除を含むことを認めなければならない。
- 現代の環境における宗教的慣習、儀式、祭典の革命と適応はある種継続性の一部である。

- アジア仏教遺産の ICCROM-CHAフォーラム: 神聖性の保護 (2013年),
- ICCROMの生きている遺産の保全プログラム (2003年)
- 人間中心のアプローチ (2008年)



- 文化的景観
- 自然の聖なる場所
- アジア太平洋の聖なる山についてのユネスコ専門家会議 (2001年 和歌山)



結論



<http://www.muaythaiantailandia.com/wp-content/uploads/2012/02/Tailandia-2011-548-Ayutthaya-Wat-Lokayasutha-Reclining-Buddha.jpg>



Global perspectives on religious heritage: Okinoshima and the formation of syncretic beliefs in world context

Session proposal for the World Archaeological Congress

Organised by Simon KANER (Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, UK)

Miki OKADERA (Fukuoka Prefectural Government, Japan)

Sam Nixon (Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures)

Session sponsored by the Fukuoka Prefectural World Heritage Registration Promotion Division

The archaeology of religion is a rapidly developing field, and how we deal with religious heritage around the world is often contentious. Much religious heritage is intangible, but there are of course many tangible aspects as well. This session addresses issues that arise through the spread of 'world religions' as they come into contact with local, indigenous spiritual beliefs and practices. This session draws in particular on work undertaken for the nomination of Okinoshima as UNESCO World Heritage to explore broader themes in the archaeology of the arrival of Buddhism and its impact on local beliefs. We invite contributions that will focus in particular on the archaeology of syncretism and case studies in dealing with religious heritage, including from the Silk Road, to set studies of early Buddhism and Shinto in a comparative global perspective.

Gamini Wijesuriya (ICCRUM)

Title: Balancing Religious Values with Outstanding Universal Value in the Conservation and Management of World Heritage Properties

Abstract: The international community ascribes Outstanding Universal Value (OUV) to places – including religious sites – with tangible remains where significance 'transcends beyond national boundaries'. However, religious heritage includes both tangible and intangible expressions specific to local or national communities that have continued to maintain them for centuries, while embracing changes in response to evolving needs. However, this is hardly recognised when OUV is ascribed and the need to reconcile the two is further hampered by the mandatory 'management' of such places to maintain OUV imposed by the international community. Through the critical evaluation of current and past approaches, this paper will discuss these dichotomies with a view to providing a theoretical and practical basis for addressing them.

Keywords: Religious Heritage, Outstanding Universal Value, Conservation

Woo Jae-Pyoung (Chungnam National University, Korea)

Title: The Ancient East Asian Regional Trade System Demonstrated by the Okinoshima Ritual Site

Abstract: Okinoshima Ritual Site is a valuable historical site confirming the existence of long-distance nautical exchanges between Japan and various East Asian countries especially around fifth to sixth centuries. At the time, Japan not only acquired advanced knowledge and strategic goods but also was influenced by religions from Mainland China including Buddhism and Taoism, through interactions with ancient East Asian countries across the sea. The discovery of this ritual site can be analyzed as a case that exemplifies the fact that securing the regional trade system, including imports of essential knowledge, materials, and religions from abroad, was the most important factor. The site particularly bears large-scale traces of national ancestral rites held by Japanese ambassadors and merchants to pray for the safety of overseas long-distance trades, at a period when safe sailings could not be guaranteed with the shipbuilding and navigation skills. In this respect, the Okinoshima Ritual Site provides some decisive evidence, which demonstrates the interaction between trade and religion in ancient East Asia.

Keywords: Okinoshima Ritual Site, long-distance nautical exchanges, interaction between trade and religion

Werner Steinhaus (Hiroshima University)

Title: Okinoshima: the relationship of religion and ritual to power and state formation

This presentation examines possible links between Okinoshima and state formation in the Japanese archipelago and relationships of religion and ritual to power and state formation. It draws also on comparable research in Central and Northern Europe. Rituals are closely tied to religion and cult and play an important role in state formation, helping consolidated social and political systems. Since one of the most important factors in state formation in the Japanese archipelago was exchange with the Asian mainland, it is likely rituals on Okinoshima accompanied and supported communication with the continent, particularly in the most intensive phase of this exchange.

Keywords: Japanese archipelago, state formation, long distance exchange, Central and Northern European comparison

Kanji Tawara (Nagasaki International University)

Title: Ceremonial and sacred places (asylum) in Tsushima : an cosmopolitan view on the border between Korea and Japan.

Abstract: It is thought that royal authority developed in the Kinki-district of Japan from the 4th century to the 5th century CE. Also during this period, craft production expanded both in scale and in materials.

Evidence of lithic production is particularly common. In addition to stone beads, various other items were copied in stone (e.g. Bangles and weapons. Most of these lithic have been found in burial contexts (tumuli), and appear to mark individual status. A major change in the organization of production occurs between the 4th and 5th centuries: initially local production of lithic items occurred adjacent to stone quarries in northern Kinki, however, by the 5th c. CE lithic material is imported from other regions to be crafted by Kinki lithic specialists, and then re-exported across the region. The timing of both political development and craft reorganization suggests that the political authority played a critical role in utilitarian and elite lithic production.

Keywords: Tsushima, Shinto, sacred places, cosmopolitan, Asia

Sam Nixon (Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures)

Title: Religious heritage on the trans-Saharan trade routes to West Africa: the landscape of early Islam at the southern Saharan market town of Tadmekka (Republic of Mali)

Abstract: Islam arrived in West Africa in early medieval times, via Saharan Caravan routes bringing commodities from North Africa to exchange for West African gold. Tadmekka was one of the first localities of West African Islam. Currently on UNESCO's tentative list, Tadmekka's ruins feature numerous Arabic inscriptions, including the oldest internally-dated West African writing (11th-century AD). These inscriptions helped structure a new landscape of Islam within the southern Saharan world. This included establishing symbolic connections between Tadmekka and the central site of Islam, Mecca. Beyond this case study, wider parallels are considered, including with medieval-era commercial centers of the Silk Road.

Keywords: Islam, trans-Saharan trade, Arabic inscriptions, symbolic landscapes

Tim Williams (University of London)

Title: Networks of Silk Roads interactions: patronage and the spread of Buddhism into Central Asia

Abstract: The international impact of the Silk Roads extended far beyond trade; local or trans-regional, low value bulk goods or elite prestige items. Their significance lay in the movement of ideas -technologies, artistic styles, belief systems, philosophies, languages, customs and moral values. The movement of religious ideas, notably Buddhism, had profound impacts. This paper explores the wider context of these movements through the complex network of Silk Roads interactions, specifically the movement of Buddhism into Central Asia, examining archaeological evidence from architecture to portable material culture, exploring the chronology of the movement and the role of elite patronage in the process.

Keywords: Silk Road, Religion, Buddhism, Central Asia, elites, patronage